猟犬たち The vindictive man

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猟犬たち　Ｔｈｅ　ｖｉｎｄｉｃｔｉｖｅ　ｍａｎ

【Ｎコード】
Ｎ４７８４Ｗ

【作者名】
ジェフティ

【あらすじ】
１４歳の解放戦線、衣笠内閣総理大臣による擬似クーデター事件から約５年。水面下で右翼と左翼の対立が激化していた。　それと同時に発生する隠蔽された連続殺人事件。官僚と政治家が次々と殺される中現れる仮面の男。国家公安委員会がひた隠しにする事件と激しさを増す対立。　激化する状況の中で新たなメンバーを迎えたハウンドドッグ、彼等は一体どうするのか――

File No，0 Fetal movement. ~The dark t

本作は『猟犬たち』『１４歳の解放戦線』の続編にあたります。
まずはそちらを読んで頂いてから本作を読むことをお薦めします。
また、本作はフィクションです。実在する企業、団体、人物とは一切関係ありません。

File No，0 Fetal movement．~The dark t

「大臣、ここは猟犬の出る幕ではないでしょう？」
狭い車内に設けられた小さな会議スペース。そこには背広姿の者が３人座っていた。防衛大臣、警視総監。そして国家公安委員長。そうそうたる顔ぶれである。
「既にテロ対策マニュアルに基づいてＳＡＴが出動している。何も心配はいらん」
髭の濃いふくよかな男がそう答える。
「大臣、私が言いたいのはそういうことではなく――」
「…私が、」
会話を切り裂くように女性が割り込む。赤いスーツを着た女性。彼女こそが今の日本の国家公安委員長、御子沢　遥。
「私が依頼したんです。いいわよ沙紀、入って」
彼女がそういうと途端に薄暗い車内に電灯の光が差し込む。時刻は既に１０時を回っているというのに夜の街という奴は明るい。
「どぅもぉー、ハウンドドッグでーっす」
眉間にシワを寄せる大臣と警視総監。対する彼女、加藤沙紀は腰に手を当てて御子沢の方をみる。御子沢も御子沢で手を頭にあててやれやれとやっている。
「沙紀、今あなたに言いたいことは山ほどあるけど一番言いたいことだけ言うわ。事件の要点って奴をね」

「いーいぃ、みんなぁ？今度はちゃあんと大臣達からも承諾を得たわ」
ＢＭＷのＺ４、カーステレオの部分に半ば強引に取り付けた無線機から課長の声が聴こえる。
「今、このすっげー豪華な料亭の中に国務大臣三人とその補佐官一

人がテロリストによって人質になっちゃったの。んでＳＡＴが大臣達わ助けるからぁみんなわ補佐官を殺害。いいわね？」
了解、とそれだけ俺は返す。
「いいんですか？そんな簡単に殺しちゃって？」
助手席に座るブロンド髪の少女が俺に問う。
「ああ、あの補佐官は前々から暴力団との関係が噂されていた。そして公安の連中が殺すチャンスを見計らっていた」
「それでそのチャンスが今ってことですか？」
「そういうことになるな」
俺はドアを開けるとトランクへと向かう。キーに設けられたボタンを押すと電子音と共にトランクのロックが解除された事を合図する。黒いＺ４のトランクの中にはジュラルミンケースのような箱が敷き詰められている。長方形のモノから小さな物や大きな物まで。俺はその中から比較的小さめなケースを取り出すと持ち手の近くのロックを外してケースを開く。そのケースの中には又も黒いものが入っていた。
Ｇ３３、オーストラリア製のポリマーフレームオート。俺はその銃を掴みスライドを引く。
「嶺崎、ターゲットの位置は？」
「ちょっと待って…」
そういうと彼女はポケットから地図と振り子を取り出す。これは所謂ダウジングというやつだ。アメリカとかでは結構採用される事もことも無きにしもあらずらしいが日本はあまり導入されていない。そう、彼女『嶺崎　エトリエル　佳奈』は詰まるところが超能力捜査官というやつだ。課長が無理を言って引き入れたらしいが詳しいことは俺もよくわからない。
「――出た、料亭の入口付近。応接室の椅子の上」
そういう彼女の手に持った振り子は何かで固めたように一点を指し示している。
「わざわざ入口にいてくれるなんて御丁寧な事だ」

そう言うと俺はＧ３３を腰のホルスターに収めると課長曰く『すっげー豪華な料亭』へと足を運んだ。

バンッ、という銃声が鳴り響いた。
「…突入を早めるぞ、全員配置につけ！」
ＳＡＴの隊長と思しき黒いＢＤＵと防弾チョッキを付けた男がそう叫ぶ。それから間も無くしてドアにはセムテックスが仕掛けられる。
「アルファ、ゴー！」
男がそう叫んだ途端、セムテックスが爆発し埃を舞い上げた。煙の立ち上る部屋の中をＭＰ５に取り付けられたライトが切り裂くように照らす。
「――おい、これはどういう事だ…」
一人の隊員が言葉を漏らす。そこにいたのはテロリストでも何でもない。ただの肉片と返り血にまみれながらも拘束され、自由を奪われた大臣だった。そしてそこに補佐官と呼べるような『モノ』は無かった。

国務大臣の拘束された事件から一日。都内のある居酒屋に部隊を取り仕切った二人の女性がいた。
知る人ぞ知る。という感じを匂わせる店内からはもう何年も前の歌謡曲がノイズまじりに流れている。まるで当時のラジオ番組でも聞いているかのように。
「全く、昨日はしてやられたわ」
枝豆を摘みながら話す黒髪の女性。見た目からすれば２０代後半と言っても通じそうな美貌を持つ彼女の本当の年齢は二倍の４０代後半である。彼女の名前は御子沢遥。昨日の事件をハウンドドッグへと委譲した際の立役者となった公安委員長である。
対して座るのはそのハウンドドッグの管理職である加藤沙紀。くしゃくしゃの短髪を振り乱しながらさっきから一升瓶で酒を飲んでいる。
「まあまあ、どうせアンタだってさぁウチに任せた時っから薄々勘づいてたんっしょ？」
「それはそうだけど、手塩に掛けたＳＡＴが突入する前にたった４人の部隊に制圧されるなんて…」
「あっ、うち二人は非戦闘要員よー？」
そう言われて御子沢はさらに肩幅が小さくなる。
「んで、私を付き合わせた理由ってのはぁ飲むためじゃあないんでしょぅねぇ？」
「ええ、依頼していことがね」
そう言うと御子沢は茶色のビジネスバッグのジッパーを開ける。そうしていくつかのポケットをあさった後、一枚のファイルを差し出す。
「――政府関係者連続殺傷事件…こんなもんいつ起きてたのよ？」
資料には事件名、そしてその被害について記載されてあった。被害

にあったのは外務省、財務省、厚生省、防衛省、文部科学省、農林水産省、総務庁…と上げ出したら切りがない。各省庁の幹部がことごとく殺害され、さらには衆議院議員と参議院議員も1人ずつ殺害されている。
「こんなに死んでいてよくもまあ隠し切れたわね…」
「まあ、衣笠内閣お得意の隠蔽って奴よ」
御子沢は皮肉るように言い放った。事実上衣笠の部下である彼女がこのような事を言うのはそうそうない。
「んで、それをウチに解決してもらいたいと」
「ええ、知ってのとおり今の霞ヶ関は衣笠を筆頭とする国民党と日本新党の渋沢達雄を軸とする左翼の対立が大分激しくなってる。この状況で火に油を注ぐなんてマネはしたくないのよ」
「なるほどねぇ――」
加藤は資料を自分のビジネスバッグへと仕舞う。
「犯人の目星ってのはついてんのかしらん？」
「――そこが難点なのよ」
御子沢は右手に持ったビールの注がれたグラスを口に運びながら言う。
「この犯人、政府関係者の可能性が高い。あらゆる警戒網の穴をくぐり抜けている。そのせいでつかめてる情報もたったこれだけよ」
すると御子沢はビールを一気に飲み干し、空いた手でバッグから一枚の写真をとりだす。そしてその写真を加藤へと差し出した。
「――これは」
「猟奇殺人なのか、それとも計画的な犯罪なのか…」
その写真に映っていた物は鬼の能面を被ったコートの男だった。男は日本刀を持ち、返り血でびちゃびちゃになりながらも刀を鞘へと収めようとしている。彼の足元には胸元を切り裂かれドクドクと血を溢れさせて倒れる死体。そして何より一番おぞましいのはその『鬼』の目がカメラのをしっかりと見ていたこと。加藤は一気に背筋が凍った。

「取り敢えず調べて見ないことには私からはなーんにも言えないわねぇ」
「ええ、頼んだわよ。アンタのとこ新しい子が加わったんでしょう？」
御子沢がグラスにビールを注ぎながらそう言うと加藤は「嶺崎ちゃんの事ね」と相槌をうつ。
「全く、あんたより上に行ったのに私は上の命令を聞いて、沙紀はＦＢＩにスカウトされそうな子を引き抜くなんて馬鹿やってさ。沙紀、いつになったら公安に戻る気になるの？」
「そうねぇ――」
途端、加藤が神妙な面持ちになる。
「気がむいたら、かな」
そう言うと「巫女沢が答えになってないわ」と怒り出す。
「まあ、今日はごっそさん」
すると加藤は急に立ち上がり、一升瓶を持ったまま店の入口へとかけていく。因みに伝票は御子沢のいるテーブルに置かれたままである。
「クソっ、今日もやられるなんて――」
そう言って御子沢は机に突っ伏した。

平日の昼下がり。俺は人民党の本部へと向かっていた。目的は鬼武者と呼ばれる連続殺人犯の逮捕。最初にその事件について耳にしたときは驚いた。既に二桁の人数が殺されたいるというのに全く情報が回ってこなかったからだ。やはりその裏には今の政府の状態も関係関係しているとは思うが。
「にしてもこれほど証拠がないなんて…」
助手席の嶺崎がぼやく。無理もない、今ある情報は監視カメラの撮った写真のみ。あとは推理していくしかない。

現状分かっていることは奴は衣笠の側近を狙っているということ。
既に衣笠の右腕とも言われる大物議員が殺害されている。メディアが嗅ぎつけないのがおかしいぐらいの大事だ。そして彼の側近の中でも重要な人物が殺されるのではないかと課長は睨んだ訳だ。そう言った理由で俺は衣笠が党首を務める人民党の本部へ向かっている。
嶺崎は念のため、別に彼女の能力を過小評価してるわけではない。それなりの実績を上げているがオカルトというのはあまり信用ならない。そのため彼女はいざとなったとき遺留品などからダウジングをしてもらおうと考えている。
「でも、やっぱり変な事件よね――」
嶺崎が写真のコピーを見つめながら言う。
「確かに鬼の面を被って犯行に及ぶというのはな」
「そうじゃなくって！」
嶺崎は写真を後部座席に置くと腕を組む。
「ほら、だってさここまで左翼っぷりを見せちゃ対テロ法とかで無理矢理なんとか出来ないのかしら？ＳＡＴとかに射殺命令とかだしちゃってさ。メディアに露呈したくなくても手の打ちようはあったんじゃない？」
俺はハンドルを切り、左折する。こうしてみてみるとこの辺りは政治家が乗るような高級車をよく見かける。
「嶺崎、俺たちの元に回ってきたという事は正攻法ではなんとかならん事件だと思え。それに奴が一概に左派とは言えない。殺害された内、衣笠と関係の無い検事や内調のエージェントも結構いる。そういう面倒な事が回ってくるんだ」
俺がそう言うと嶺崎は何も言わずにフロントガラスを見つめる。歩道に植林された木は葉を落とし、秋から冬への移り変わりを感じさせていた。

数時間前　都内某オフィスビル

「さってぇ、今度の事件はスペシャルな感じよーん」
その日、課長はいつもと変わらぬ調子でビルへ入ってきた。
「んじゃ、未来ちゃん頼んだわ」
そう言って彼女は大辺の肩をぽんと叩いて自分の執務室へと戻っていく。
「えっと、それじゃ私の方から今回の事件について説明します」
そういうと大辺はリモコンのような物を使い、プロジェクターを起動する。
「本件は政府関係者を狙った連続殺人事件です。今のところの被害者は――この通りです」
大辺がそう言うと画面が移り変わり白黒の無機質な名簿へと変わる。
そこにはびっちりと人の名前が記されている。
「うわ、こんなにいるんかよ…いつのまに…」
拳隆が声を漏らす。無理もない、この量死んでいてここまで隠蔽しているとなると相当だ。
「本件は国家公安委員会からの依頼となります。犯人と思われるのはこの人物」
画面が切り替わる。監視カメラの映像が映し出される。
「この映像に映っている仮面の男が犯人だと思われます」
「にしても手掛かりが少なすぎないか？公安は何をしてたんだよ？ここまで死んでいてさ」
「――政府関係者の犯行か」
俺がそう言うと大辺が小さく頷いた。

俺たちがもうすぐ人民党本部へと到着するという所で急に携帯が鳴り響いた。一旦車を歩道側に寄せ、ハザードを付けると俺はポケットから取り出した黒い携帯を耳元へ当てる。

「どうした？」
一言目はそれだった。相手は大辺だったので俺は何か掴めたのだろうと思ったからである。
「ええ、ついさっき人民党本部のポストに三つ巴の記された犯行予告が送り付けられてたの。狙いは課長の睨んだ通り衣笠の側近よ」
「三つ巴――」
三つ巴と言えばコンマや勾玉のような形をした巴が三つ描かれている伝統的な文様だ。よく和太鼓などに描かれていたり家紋に使われていたりする。そして何より三つ巴は『鬼』と関係している。それは鬼武者の犯行予告と見て違いはないだろう。
「しかし妙だな」
「ええ、今まで犯行予告なんてしてなかったのに何で…」
何かがある。俺はそう思えてならない。いや、そう思うのが自然なのだろう。
本当に奴の狙いは衣笠の側近なのか？根本的な事を疑う。しかし奴に関することは全く分かっていない、推理することさえ出来ない。つまり直接本人に聞くしか無いということ。
「分かった、目標は俺がなんとかする。必要に応じて拳隆も駆り出せるようにしておけ」
俺がそう言うと大辺は了解と言って通話を切った。俺はツーツーという音で通話が終わった事を確認すると携帯をポケットにしまい、ハンドルに手を戻す。
「いいか、お前は絶対に犯人の前にでるな」
助手席の嶺崎に強い口調で忠告する。対する嶺崎は「好きで戦いになんて巻き込まれないよ」と随分と呑気な事を言っている。
やれやれと頭をなで下ろした後アクセルを大きく踏み込んだ。
エンジンの重低音が響き、体を震わせる。急な発進に驚いたのか嶺崎は体を縮こませた。

車を停め、本部の中へと俺と嶺崎は足を踏み入れた。既に犯行予告の件は知れ渡っているらしく所属議員達からは妙な焦りを感じ取ることができた。特に狙われている側近の者は相当怯えているのではないだろうか。
課長から連絡が来ていたのだろうか。受付の女性が営業スマイルを見せた途端、俺たちが何者なのか分かったようで一瞬にして顔色が変わった。
俺はいつものように警察手帳を取り出すとそれを彼女に見せる。俺の後ろの嶺崎も洋服のポケットから手帳をとりだす。勿論これはダミーだ。俺達は本来存在しない組織なのだから。
すると受付の女性は笑みを取り戻し、三階へ行けと案内した。そこに鬼武者の標的がいるという事だ。
入口から少しばかり右に行った所にあるエレベーターに乗る。無駄に豪華なエレベーターは国民の血税を浪費している事を現している。チーンという昔ながらのエレベーターの音が響き、目的の三階へ到着する。俺が「開」と書かれたボタンを押すと嶺崎がそこを通る。確かこの廊下の突き当たりがその代議士の居場所だった気がする。人民党の本部は騒がしかった。殺人予告が届いて慌ただしくならないのもそうだが普通の警察機関でなく俺たちが来ている事にさらに驚いているのだろう。
「ねぇ、さっきから変な目で見られてるような気がするんだけど…」
嶺崎は顔を歪ませながらそう言う。
「いつもの事だ。慣れなければここでは喰っていけんぞ」
俺は冷めた口調でそう言うとドアの前で立ち止まる。無論、ここが目的地だからだ。
コンコン、二回ノックする。だが反応はない。
聞こえていなかったのかと俺はもう一度ノックする。今度は先程よりも強く。
しかし、全く反応はない。
「――下がっていろ、嶺崎」

左手で嶺崎を抑え、右手で銃を引き抜く。
「ちょっと、まさか…」
「荒っぽいが、可能性は否定できないからな」
扉を蹴る。ドンッという大きな音がしてドアが前へと倒れ埃を巻き上げる。既に俺は周りの議員から注目の的だ。
だが、その注目は一瞬にして俺から俺の前のモノに変わった。
そこにあった『モノ』
死体と鬼。返り血にまみれたコートを着た鬼と鮮やかな赤に染まったスーツの男。
案の定、既に手遅れだった。

代議士の姿は実に無残だった。両腕を切り落とされ、胸を突かれて血がドクドクと溢れていく。美しい赤は灰のカーペットを赤黒く染め上げ、鬼の真っ白なコートも真紅の模様を付けていく。
俺は銃を向けたまま動くなと言う。だがその途端に鬼は余裕を見せるかのように刀を鞘へと収める。
「動くなと言ったはずだ」
足へ一発。４５口径が直撃コースに入る。しかし鬼はその銃弾が放たれるのを見切ったかのように右足を後ろへスッと移動させる。その動きはまさに侍のように。
すると鬼はそのまま窓へと走り出す。両腕を前でクロスさせてジャンプする。パリンッという破裂音がして奴はそのまま下の造園に落下する。俺もそれを追うように窓から飛び出す。それと同時に建物へと反転しワイヤーガンを窓へ放ち、降下する。これで奴から多少の遅れは取り返せると急いでワイヤーガンのトリガーを引き窓へ引っかかっていたワイヤーを仕舞う。
「ちょっと！どうするつもりよ！？」
窓から大声を張り上げる嶺崎。だが今の俺に彼女の相手をしている暇は無かった。鬼は返り血のついたコートを翻しながらＺ４の横に止められたバイクにまたがっている。無論、このままみすみす逃が

す訳にはいかない。
俺も急いで走りながらキーのロックを解除し、ドアを開けエンジンをスタートさせる。シートベルトなんていちいちしている余裕も無く俺はアクセルを強く踏み込んだ。

「クソッ、公道でこんなにも――」
霞ヶ関の大通り。ヘルメットも何もせずに鬼はコートをはためかせながら走行していた。その速度はかなりの物でヘルメットもなしに対向車をすり抜けていくなんて恐ろしいマネも披露してくれている。すると途端に俺の携帯に大辺から着信が入る。俺は運転に集中したいところなので左手でうろ覚えの説明書を頭に思い浮かべてハンズフリーモードで電話に出る。
「何があった、こっちは目標とカーチェイスちゅうだが――」
「大変よ、やはり予感は的中していたわ」
大辺が俺の話をそっちのけて言う。
「さっきから政府機関からの死亡者が湧くようにあがってきてるわ。しかも皆鬼の面を被った男に殺されたらしいわ」
「じゃあ奴は複数犯だったと？」
俺はアクセルを踏み込んで信号機を無視する。トラックの運転手が俺の方を見ながら叫んでいたが無視して走り続ける。
「まだ断定は出来ない。でも複数犯にしては不可解な点があるのよ」
「その不可解な点ってのは？」
「殺した相手に政府関係者っていう以外共通点も無いし協力して犯行にあたったような形跡が無いの。皆自分勝手に殺してる…」
「――分かった。そっちの方は拳隆とお前に任せる。それと…」
俺は一旦口ごもった。本当は嶺崎について言おうとしたのだがそれよりも重要な事があったからだ。俺の前を走っていたバイクから急に人が飛び出し、路地へと走っていく。このまま逃げ切るつもりだろうがそう簡単に逃げられては困る。俺は無理やりにＺ４を路上に停めると巡回に来ていた警官を無視して路地へ走りだした。

霞ヶ関の路地裏にその男の姿はあった。彼の前にあるのは血にまみれた肉片。路地裏の影に光をかき消され、ビル風に乗って腐乱臭が鼻腔をくすぐってくる。

「にしてもひっでぇな…」

赤いラーダースジャケットを着た男、拳隆翔。彼は連続して発生した政府関係者の殺害事件の現場のひとつに来ていた。既に犯人は逃亡していてここにあるのは死体だけ、見た感じからして死んでからそんなに経ってはいないと思う。

被害者は法務省の役人。犯人を目撃した者はいなかったが決定的な証拠があった。死体の胸の真ん中に刺し傷、そしてそれを囲むように三つ巴の形に傷が出来ていた。服ははだけていて上着とワイシャツを外してから三つ巴を胸に刻んだのだと思われる。

にしても妙だ。今までこんなことを犯人はしてこなかった。それが何故突然マークを刻んだり犯行予告を出したりしたのか。

「――これは」

拳隆は死体の傷を見ているた何かを発見する。血で染まった体。よく見るとそこに何かが書いてあった。

『お前の本当の腹底から出たものでなければ、人を心から動かすことは断じてできない。』

「なんだこりゃ？」

拳隆にはなんなのか理解が出来なかった。仕方なくポケットからカメラを取り出して写真に収める。フラッシュをたくと傷が一層鮮明に見えた。

コートを着た鬼はゴミ箱を倒しながらビルの合間を通り抜けていた。銃を撃てば当たる距離だがこんな街中で銃声なんかしたら大事になりかねない。政治的な均衡を保とうと公安が事件を隠していたのが水の泡となる。

サイレンサー付きの銃をわざわざトランクから出している暇だってない。つまり足で追いかけるしか無いということを示している。

Ｇ３３は既にスライドが引いてありいつでも奴を殺すことが出来た。だが前述通りそういう訳にもいかない。

光の届かないビル影の細い路地を走る。奴はとの距離は狭まってはいるが問題はスタミナと土地勘という事になる。こんな細く錆びれた道が俺はあるとは知らなかったが奴にとっては庭のようなもだという可能性も捨てきれないというわけだ。

ワイヤーガンを撃つ。不法投棄の自転車で邪魔をしようと図るも奴は刀を引き抜き一筋でそれを切ってみせた。観光に来た外国人が見ればサムライだのニンジャだのと大喜びするような光景だろう。

光が差し込む。光の方向にはビルが無く、コンクリートの塀が連なっている。つまりは『行き止まり』ということだ。

「行き止まりだ、大人しくしろ！」

俺がそう言って銃を構える。目の前には鬼。刀をもった鬼がいたはず。そう、いたはずだったのだ。

だが、そこには人の姿すら無い。俺は目を離した覚えは無かった。もしかして塀の上かと辺りを見回すがそのような人影はおろか人の気配すら無い。

「――取り逃がしたか…」

ホルスターにＧ３３を納め、そうつぶやいた。

「予定よりも早くないか？私はお前の言うとおりにした。お前も私の言うことを聞くのがフェアではないか？」
薄暗闇の中、うっすらとしろい顔が映る。声は低く、恐らく合成されたものだろう。
「ええ、貴方はよくやってくれたわ」
「では交渉通りにするべきではないのか？お前は急ぎすぎている」
女の声と男の声。両者共にボイスチェンジャーか何かで声が細工されてあり本物の声ではない。機械にも似たような声が暗闇に響く。
「…分かってるわ。私の指示に従う代わりとして貴方は復讐を果たす。そして私は貴方の手助けをする。そうでしょ？」
「その通りだ。私がこのような茶番を起こしているのも復讐の為。両者が合理的にならなければそれは正しいネゴシエーションとは言えない。違うか？」
「そうね――」
女は一旦口ごもったが少しして会話を再会する。
「いいわ、貴方の好きなようにして。代償は彼を殺すことだけよ」
そういうと女は白い顔へと近づく。その顔は瞬き一つせず顔色も一切変えない。
「頼んだわよ――鬼武者」

Connect to the next File.

俺たちが目標を取り逃がした翌日。公安から連絡が来た。その内容というのは犯人の目星がついたというのだ。もともとこの事件を捜査していたのは俺たちではなく公安なので別に有り得ない事態でもない。

「さってーん、その公安が狙ってるっつー容疑者だけど――」

課長は公安が送り付けてきた書簡から一枚の写真を取り出す。そこに映っていたのはスーツ姿の若い男。

「名前は御子沢宗介。内調のエージェントね。はっきし言って詳しい事は公安が黙りなもんだから教えてくんないけどさーちょっち嫌な感じがすんのよね」

課長は写真を人差し指でトントンと突きながら言う。

コトン、という音がする。嶺崎が給湯室で入れてきたコーヒーを机に置いていた。俺は熱い内にコーヒーを一口啜る。

「確かにウチに依頼してた癖に急にまるでこっちの扱ってる事件だと言わんばかりの態度ですね…」

大辺がキーボードを叩きながら言う。

確かに不可解な点は多い。ここまで正確に犯人がわかるのならそもそも俺たちに依頼する必要性はあったのかと。

「でもぉ書類上はウチ預かってるからさぁまーた死傷者が出たら責任取らされんの私な訳なのよ」

すると拳隆が事務椅子から立ち上がって言う。

「要はＳＡＴの連中がなんとかするまで俺達はＳＰ紛いってことかよ」

「いんやーそれもあるけどぉ裏に何かありそうなのよね…」

課長の声のトーンはいつもより低かった。やはりこの件は何かあるのだと俺も思った。

「では、俺がその御子沢とやらを」

「ええ、そうね」
そう言って課長は頷く。
俺は嶺崎の肩をポンと叩くと車のキーをちらつかせて付いて来いと無言で合図を送った。
それにしても引っかかる。
『御子沢』という苗字が引っかかってならなかった。

亜久と嶺崎が御子沢宗介の捜査へと向かい、拳隆と大辺が次の被害者を防ぐために国会へ行き誰もいなくなったオフィスビル。
彼女、加藤沙紀は一人でパソコンの前に呆然と座っていた。ディスプレイには住基ネットや戸籍情報等が記載され、名前での検索を行う画面が映されている。
彼女はキーボードを叩き、ある人物の名前を入力する。『御子沢宗介』事件の容疑者の名前を。
間も無くしてディスプレイに表示される彼に関するさまざまな情報
彼女はそれを見てうなだれた。
「――何やってんのよ、遥」

一連の事件には統一性があった。方法は様々だが死体、もしくはその付近に刻まれた三つ巴。そして油性マジックか何かで死体に書きなぐられた言葉。
『お前の本当の腹底から出たものでなければ、人を心から動かすことは断じてできない。』
確かゲーテのファウストで登場した言葉では無かっただろうか。一連の事件の犯人は衣笠に対する侮蔑の意味を込めてこの言葉を残したとしか思えない。

にも関わらず公安は左派である日本新党には全く触れずに何故か内調のエージェントを犯人と決め込んだ訳だ。

ＳＡＴの突入は２２時丁度ということだ。容疑者の自宅アパートの付近には既に私服警官と思われる者が何人か確認できたりしていた。俺たちは突入に介入する権利は持っていない。だから仕方なくアパートから少し離れた所に車を停めて張り込んでるという訳だ。

「――全く動きが無いじゃない」

助手席の嶺崎が退屈そうに足を伸ばしながら言った。

「電気は点いているから御子沢は恐らくいるんだろうが……」

俺はハンドルを人差指でトントンと叩きながら前かがみにアパートを見ていた。私服警官は３人そこらだろうか。

「にしても私、こいつが犯人だなんて思えないんだけどさ」

それは俺も同意出来る。俺は明かりを点け、御子沢に関する資料に再び目を通す。まだ内調に入ってから一年そこらの新人。若気の至りでこんなだいそれた殺人事件を犯すとは思えないし、ある種腐敗した政治への正義感からの行動ということもあるかもしれないが５年前の擬似クーデター事件の藤見署副署長のような正義感を持ち合わせたようには見えない。

それに複数犯としか考えられないというのに何故彼だけが逮捕となるのも意味が分からなかった。

「模倣犯ってことなのかな……」

嶺崎がそう呟く。

「公安がひた隠しにした事件を模倣できるとなると一部政府関係者しかいないだろう」

「そうだけど……やっぱりアイツが犯人なのかな？内調なら情報ぐらいは――」

「だとしても模倣した意図が全くつかめないがな」

俺はそう言って体を起こし、シートに身を委ねた。

「二人とも、ＳＡＴが突入を早めるらしいわ」

無線機から大辺の声が響いた。
「了解した。そっちはどうだ？」
「さっき三つ巴の記されたカードが一枚見つかったわ。議員が狙われる可能性が高い」
そうなるとやはり複数犯なのだと俺は再度確認する。どの犯行も単独犯を匂わせる行動ばかりだがここまで来ては単独ではできないだろう。
「わかった、気をつけろよ」
「そっちもね」

大辺からの通信から１０分も経たないうちにＳＡＴは動き出した。精密機器メーカーの輸送トラックが道路で急に停車したかと思うと荷台のハッチが開かれ、ＢＤＵと防弾ベストに身を包んだ者達が出てくる。つまりこのトラックは偽装車両ということ。ＳＡＴの隊員たちはダッドサイトとレーザーエイミングモジュール、サイレンサーの装備されたＭＰ５－Ｊをその手に掴んでいる。
ぞろぞろと、かつ俊敏に取り囲むように御子沢のアパートを囲んでいくＳＡＴ。よほど公安も焦っているのだろうと窺える。
「……にしても早いな」
俺はホルスターのＧ３３に手を掛けながら言った。それは嶺崎も承知していることだろう。
「嶺崎？」
俺は嶺崎の座っている助手席の方を振り向く。すると彼女は振り子を取り出して地図に向かって垂らしていた。振り子の先端は鋭い十字架になっていて如何にもオカルトという臭いを漂わせている。
「どうした、何かわかったか？」
「シッ！」
嶺崎がやけに強い口調でそう言った。依然として彼女は顔色を変えず眉間にシワを寄せたまま地図と睨めっこをしている。
対してＳＡＴは既に部屋への突入を開始しようとしていた。既に住

民の退去は上の方がやったらしく随分と荒い手口を使っている。いくら重犯罪の容疑者といえど民家にバッティングドラムを使ってドアをぶち壊して突入するなんてマスコミにバレたら責任を問われる事になるだろう。どちらにしろ情報統制で伝わらないのだろうが。
「マズイわ――」
嶺崎が途端に表情を変えた。先程までの集中よりも不安を感じる事ができる。
「何が分かった？」
「……アイツ、逃げるわ」
嶺崎がそう言うと同時に隣を黒い乗用車が通り抜けた。先程から何台か車とすれ違ったがそれとは違う奇妙な感覚が全身を包むかのように広がった。
「亜久さん、あの車！」
「――間違ってたら責任はお前がとれよ」
アクセルを踏み込む。ハンドルを一気に回転させて１８０。回転するとそのままギアを上げる。
「間違いないわ。ダウジングが間違ってたとしても私見た。あの車に帽子を深く被ってサングラスをした男が乗ってたところを」
「確かにそれは怪しいな」
距離を詰める。だが法定速度など奴には関係は無く夜中といえど交通量のある都会の住宅街を通り抜けていく。恐らく１００ｋｍ近く出しているのではないか。
「クソッ、銃を使いたいところだが――」
下手に住宅街で撃つわけにもいかない。なんだったらＳＡＴが住民退去をさせていた地域でさっさとタイヤでも撃っておけば良かったと後悔する。
人気の無い道へと入る。交通量がだいぶ減ったせいか向こうは大分飛ばしている。
「……嶺崎、運転代れるか？」
シートに押し付けられ、小さくなっている嶺崎に俺は尋ねる。

「運転って……私まだ免許とってないよ、自動車学校に通ってるところよ？」
「仮免か。無いよりマシだ」
そう言うと俺はスイッチを押してハードトップを開ける。冷たい風が一気に車内へ入り込んだ。
「ちょっと、何してるのよ！」
「奴を捕まえるんだ。お前は運転を代われ！」
無理やりに嶺崎の服を引っ張り運転席へと座らせる。対する俺は１００ｋｍ以上で走行する車の外へと上半身を投げ出す。
「いいか、下手にブレーキやハンドルを切るなよ！」
「分かってるわよ」
銃を構える。移動している上に風に煽られる。勿論照準器は俺の思った通りの所へなかなか向かない。向こうもこちらの動きに気づいたのか蛇行運転を開始している。狙っている間にも難度は増しているということだ。
クソッと心の中で叫ぶ。車体に撃っても特にダメージにはならない。ましてや俺の持っている銃はハンドガンだ。長物ならまだしもタイヤに撃つ以外方法は無い。
「亜久さん、まだなの！？」
「もう少しだ！」
投げやりに叫ぶように俺は応え、もう一度照準器に神経を集中させる。リアサイトがタイヤを捉えるもフロントサイトが合わない。夜間用に照準器に蛍光色で塗られたダットが光る。その光がタイヤを抑える。
バンッ、銃声が響く。でも俺には風が強すぎて音なんて聞こえやしなかった。

亜久と嶺崎が御子沢宗介を追いかけ始める数十分前。拳隆翔と大辺未来は国会議事堂にいた。

他愛もない党首討論の行われる会議。例え今が水面下の対立の真っただ中といえどここで大きなことをしでかす政治家はいない。先に動いたほうが負けという言葉がここには適応されている。
全ては今衣笠の手中であり。それを開放せんとする動きもどうにもやりづらいという訳だ。
野次の飛び交う議会。その茶番を拳隆はＢＧＭのように耳から耳へと受け流していく。よりかかった壁が少し振動していた。
この国は外見上は理想的な民主国家だが本当は究極的な独裁国家だ。
「本音と建前は別腹ってか――」
拳隆はそうつぶやきながら皮肉なもんだなと思った。
腕時計を見る。先程鬼武者からのメッセージと思われるカードが見つかり、大辺はそれについて連絡するために席を外している。
今彼の隣にいるのは厳つい顔をしたＳＰや警備員。姿勢を崩して壁によっかかっている彼とは対照的に背筋を伸ばして辺りへ注意を振りまいている。
全くご苦労なことだと彼は内心呟いてもう一度時計を見る。犯行予告と思われるメッセージが届いてから１０分が経過しようとしている。
ふぁーっとあくびをして背筋でも伸ばそうかとした途端に大辺が廊下を歩いてくる。それを確認した拳隆はそそくさと姿勢を元に戻した。周りの警備員たちから降り注がれる視線に彼は笑顔で受け答えた。

「んで、亜久の方はどうだったって？」
「まだ動きは無いらしいわ」
カタカタと階段の手すりの部分に押し付けるようにして置いた小型のノートパソコンのキーボードを叩く。ディスプレイには小さいながらも容疑者のデータやら国会議事堂の各所に設置された監視カメラの映像が映し出されてる。一体どこからそんなもの引っ張り出し

ているのかと突っ込みたくなる衝動を堪えて拳隆は大辺に問う。
「犯人と思しき人物は？」
「一応警察に検問させてるし監視カメラから戸籍割り出したりして探してるけどどうにもね……」
大辺は笑いかけながら両手を上げてもうおてあげだとやってみせた。
「でもやっぱりこんな物まで来てんだから何か起きるのは――」
「確実ね」
そう言うと大辺は三つ巴のプリントされたカードを右手で持った。
彼女の手は一応白い鑑識とかが付けている手袋をはめている。
「でも何かメッセージのような物は無し。書いてあるのは三つ巴だけ――」
拳隆は頭を掻く。
「……今は地道にやるしかないってことね」
そう言うと大辺は再びキーボードへと顔を向けた。

弾丸をタイヤに打ち込まれた車は途端にバランスを崩し、街路樹へと衝突した。衝撃によりボンネットは開き、フロントガラスはまだ綺麗だったがミラーやライトはぐちゃぐちゃに砕け無残な姿になっていた。
嶺崎はブレーキを踏み、御子沢の物と思われる車に横付けする形で停車する。俺はドアも開けずに無理矢理飛び越えて車から降りると構えていたハンドガンをそのまま運転手へと向けジリジリと近づいた。
運転手は嶺崎が言っていたように黒い帽子にサングラスという如何にもば出で立ちである。俺は地面へと倒れた男に押し付けるように銃を突き立てた。そして左手で無理やりに帽子とサングラスを外す。向こうは抵抗をせず諦めてようにしていてそれは造作も無かった。予想通り覆面の下は御子沢宗介だった。
「お前が連続殺人事件の犯人か？」
御子沢は反応しない。目を見開いたまま瞬きもせずに横たわってい

る。俺は嫌な予感がしてコートのポケットから小型のＬＥＤライトを取り出すとその光を御子沢の目に当ててみせる。
「死んでるだと……」
案の定、瞳孔は開いていなかった。脈も一応確認したが動いていない。完全に死んでいる。
にしても妙だ。先程の衝突で死んだとしても外傷が全く見当たらない。むしろ事故死というよりも薬物による自殺という方が信憑性があるというほどだ。
「あっ、亜久さん！」
嶺崎が車の後ろの方で俺を呼ぶ。彼女は車のトランクを開けて中身を確認していた。
「――これは」
「やっぱりこの人が犯人なのかな……」
トランクに入っていたのは大きめのキャリーケース。そしてその中を開けるとノートパソコンやスーツといったビジネス用品が詰め込まれている。だがその下に隠されるように鬼の面と真剣が入っていた。
しかし気がかりな点は俺が見た鬼武者と持っている刀が微妙に異なっているという点である。俺が見たのは鍔の無い木製の鞘の日本刀だがこれには鍔が付いていてよく時代劇とかで侍とかが持っている日本刀だった。
複数犯という事は分かっていた。しかしながら突然の謎の死といいＳＡＴの間抜けな不手際といい。この事件にはまだまだ調べるべきことが散在していた。

その報せは唐突に届いた。しかし二人はそれよりも前に察知していた。
犯人が狙うとすれば首相を始め、各党のトップが出席しているこの事件に関する特別委員会だと思っていた。それが妥当な考えだろう。

犯人の左翼的な行動や政府との繋がりもあると思われる行動を鑑みれば隙を突いて首相を狙うのがベストなのでは無いかと思っていた。

「……未来ちゃん、２３１番カメラを拡大して」

監視カメラの映像が映し出された大辺のパソコンをのぞき込むように見ている拳隆が唐突にそう言った。

大辺はそれに対して何も言わずにキーボードを叩き、指定された番号のカメラを拡大して見せる。しかし映像を拡大した途端に大辺は声を漏らした。

いたのだ。公安が隠していた連続殺人犯が。大辺は急いでキーボードを叩く。途中焦って間違えたりするもから録画しているデータのバックアップをハードディスクとＵＳＢメモリーに二つと念入りに作るとＵＳＢを抜いてパソコンをたたむ。

「未来ちゃん、あのカメラってどこの映像？」

拳隆は手すりから離れながらそう言う。

「これは――議員会館や首相官邸を繋ぐ地下通路ね。一般には公開されて無いと思うんだけど……」

「おいおい何でそんなとこにいるんだ？」

拳隆は愚痴を言いながら赤いアタッシュケース引っ張り出すとそれを蹴るようにして開ける。その中には黒光りした物が一つ。一般的にはサブマシンガンと言った方が伝わるのだろうが正式にこの銃の名前は９ｍｍ機関けん銃。短機関銃の一種だが名称は機関けん銃である。エムナインという愛称の日本製短機関銃だ。

拳隆はそのエムナインを掴み、スリングを肩へとかけるとＵＺＩやイングラムと同じＬ型ボルトを引き、初発を装填させた。

地下通路には足音が反響していた。他には何の音もしていない。人も誰もいなく利用しているものも余りいないのではないかと窺える。

しかしその通路のど真ん中に歪な物があった。『死体』だ。
胸を突き刺された死体はワイシャツを脱がされ、胸に三つ巴の傷が記されている。それと一緒にカードが置かれていた。小さな白いカードに書かれたのはやはりゲーテの言葉だった。
『人間が真に悪くなると、人を傷つけて喜ぶことのほかに興味を持たなくなる。』
格言と反省で登場する言葉だ。そしてそれを見て誰かがフッと鼻で笑った。そう、鬼の仮面をした誰かが。

鬼武者が一人。正確に死体もその中に加算するかどうかは置いておくが彼が佇んでいた地下通路に足音が響いた。ガランとした地下通路というのは音の反響が凄まじいもので階段を降りる音の一段一段が彼の耳に明確に聞こえていた。
それから数秒して一人の銃をもった男と女が鬼武者の方へそれを構えて降りてきた。対する彼は血がべっとりとついた刀を振り払うようにして血液を飛ばすと鞘には仕舞わず下に向けた。
銃を構える金属音がエコーのように反響して地下通路にこだます。
「――お前がやったのか？」
エムナインを構えた拳隆が言った。しかし鬼武者は答える事も無くただじっと見つめていた。仮面の下に隠れた眼球はどこか一点を見つめている。
「……話すつもりはねぇってか！？」
2，3秒。銃声が鳴り響いた。それと同時に鬼は特徴的なマントのような白いコートを翻してみせる。
ブツッ、ブツッという鈍い音と反響した銃声が奥へと響いていく。
議員会館から国会へ行こうとしていた議員がこちらの様子を見て逃げ出したのが見える。
銃声が鳴り止んで銃口からは煙とガンパウダーの香りが立ち込める。
拳隆はエムナインをそのまま、大辺は護身用のコルトガバメントを

ゆっくり腰のホルスターにしまおうとする。しかしそのカランカランと乾いた音が響いた。
エムナインから打ち出された9mm弾はまるでテープにでもへばり付いたかのように彼のコートに引っ付いていて彼がコートをもう一度翻した途端に弾丸は舗装された地下通路へと落ちたのだ。
「嘘……あれって軍用の衝撃吸収素材……」
大辺が言葉をこぼした途端、鬼は急に背を向けて走り出す。
「クソっ、未来ちゃんはここにいろよ！」
拳隆はそう言うとスリングを掛けたエムナインから手を離し、両手を振って走り始める。
あの素材。大辺には心当たりがあった。実際にハウンドドッグでも使ったことがあったからだ。
今から5年前の擬似クーデター事件。その際に亜久がインナースーツとして着用したモノと同じ素材、もしくはその発展形か――
大辺は崩れるようにして床に座り込んだ。

「クソッ、どこ行きやがった……」
地下通路は終わりを告げ、議員会館への出口まで来てしまっていた。
既に鬼の姿は見当たらずどこにいるかなんて検討すらつかない。
エムナインのスリングを肩から外し、床へと落とす。「コン」という音が奥へ奥へと響いていった後にもう一つの音が聞こえた。足音だ。
拳隆はホルスターから大辺の持っていたモノと同じガバメントを引き抜こうとする。
「あーもう、あたしよ。あたし」
拳隆はその声を聞いてガバメントを引き抜くのをやめる。
「で、その調子だと逃がしちゃったのね？」
「こりゃ失礼」

先ほどとは打って変わっておちゃらけた表情で頭を掻く。
「まあいいわ。さっき亜久との連絡もとれたし」
そう言って大辺はポケットから白い携帯電話を取り出してみせる。
「んで、なんだって？」
「取り敢えずわかってるのは容疑者は死んだってこと」
「死んだ？」
「そっ、死んだ」
大辺は敢えてにこやかな表情をしてそう言う。
「どうやらＳＡＴがへまして亜久と嶺崎ちゃんが取り押さえる始末になったんだけど――」
「誰かに殺された？」
「その線が怪しそうね。逃走中に街路樹にぶつかった後死亡を確認したらしいけど目立った外傷はどこにも無し。詳しい事は検死に回してみないとわかんないけどね」
ふーんと拳隆はつまらなそうに相槌を打つ。自分が逃がしてしまったというのが相当気に入らないんだろう。すると今度は拳隆の携帯が鳴った。亜久からだ。
「もしもし？」
「拳隆、容疑者は捕まえたか？」
「いんやー……それが――」
あははと笑ってごまかすも亜久の大辺にすら聞こえる程の大きなため息の後仕方なく白状する。
「ではエムナインの弾丸は？」
「は？」
予想もしなかった質問に拳隆はたじろぐ。
「エムナインの弾は着弾したのか？」
「いや、なんでそんな事を……」
そういうと亜久はまたも大きなため息をつく。
「大辺から聞いてなかったか？エムナインの弾丸の一部に発信器を取り付けた筈なのだが――」

拳隆はジロリと大辺を睨む。すると大辺は無言で手を合わせてゴメンゴメンとやっている。
今度は拳隆が大きなため息をついた。

薄暗い路地裏にその男は座り込んでいた。
まるで飢えた浮浪者のようにぐったりと。まるで死んだようにぐったりと。
でも彼は肉体的には何の疲労感も感じていない。鮮烈な精神的疲労感が仮想的な肉体的疲労感を生み出しているだけだ。
彼は問う。自分自身に。
『これは正しいのか？』と
そして答える。
『これは正義だ。』と
フェンス越しに通っていく終電が耳を引き裂くような轟音を立てる。
一瞬だけ暗黒の世界が人工の光に照らされる。それも束の間、闇は再び訪れる。
都会の空は暗い。空気は淀み、空は低い。
『汚い』
彼はそう呟いた。それが何に、誰に対するものなのか。いや、全てに対するものなのかは分からない。
ただ汚い。汚らわしい存在だった。
地面に仰向けになって空を見る。死んだ人間のように倒れる。
『……僕は正しいんだね？』
彼はもう一度確認すると目を瞑った。そうすれば汚れと隔絶できる気がした。

Where is the bru

nt of goodwill?

File No，3　Conflict in the conflict~

朝方。彼女は旧友の元へと向かっていた。その手にはたんまりと書類を持っていつもとは違った雰囲気を醸しながら。

「委員長、お客様が」
「客？こんな時間に？」
御子沢遥は書類の山に埋もれながら問う。
「ええ、その……ハウンドドッグと申していますが……」
その言葉を聞いて御子沢の表情は少しだけ引きつった。嫌な相手に遭遇した時のような顔をあからさまにしてみせた。
「いいわ、通して」
御子沢がそう言うと秘書の女性が一旦外へでる。
ため息を着き数秒だけ目を瞑った。目を抑えると疲れているのか変な音が鳴る。
そんな事をしてるとギィっと木製の重いドアが開いた。そこに居たのはかつての友である加藤沙紀。今では所属も何もかも違っているがよく食事に行く昔からの親友だった。
「遥、どうしたのよ。最近のあなたちょっちおかしいわよ」
沙紀が何時になく真剣だという事は御子沢は直ぐに把握出来た。
「何？頼りないＳＡＴを従える無能な国家公安委員長に同情しにきたのかしら？」
御子沢はあからさまな作り笑いと共にそう言ってのけた。しかし加藤の表情も物腰も変わることは無かった。
「確かにこの事件は何か不可思議ね。でもそれは犯人だけじゃないと思うのよ」
加藤はゆっくりとファイルから資料を取り出しながら御子沢の座る机へと近づく。

「遥、新しくでた被害者が何者なのか知ってる？」
「……嫌でも知ってるわよ。渋沢が殺されたんでしょう？左派のリーダーが――」
今、国政は二分しつつある。衣笠に反抗する左派のリーダー。今まではどちらかというと衣笠方の人間が殺されていた。だから加藤は左派の犯行を睨んでいた。だがしかしここで左翼のトップが殺されたとなるとどうにもそれは説明できなくなる。
「ねえ、遥。あなたは犯人をどう思ってる？」
「どうって……」
言葉が詰まる。犯人に関することは一切分かっていない。単独犯か複数犯か。それとも単なる模倣犯なのか。やっと捕まえた尻尾も所詮はトカゲの尻尾切りだった。
「私はね、どうにも左翼の中でも対立があるようにしか思えないのよ」
「……渋沢がトップというのが気に入らない奴がいた。」
「ええ、そうなるわね」
加藤はそう言って被害者と犯行現場の資料を御子沢の机に置くと近くにあった応接用のソファーに座る。黒いソファーは彼女の体を優しく包みこむが彼女の硬い表情は揺るがなかった。
「それで沙紀、私に推理を言う為にここにきたの？」
「――推理も、よ」
そう言うと加藤は財布を取り出す。
「久々に二人で話したいの。あの時の店で」
御子沢は深くため息をついた後、「わかったわ」と応えた。

そこは小さな定食屋だった。内閣の一人が入っていくようには見えない小さな下町の昔ながらのお店という感じだ。
スモークガラスの引き戸を開けるとガラガラという音が鳴り奥からは気前のいい店主の声が聴こえる。

加藤と御子沢はカウンター席の一番奥に腰掛けた。ここが昔から彼女達の指定席なのだ。
「……懐かしいわね」
御子沢はそれだけ言うと口を閉じ、茶色いグラスに注がれた水を口に運ぶ。
「ねえ、もういい加減にしたらどう？」
「なにが？」
「――御子沢宗介。遥、貴方は何をしたいの？」
御子沢は黙った。その間に加藤は店主の男に生姜焼き定食を注文した。
店はガランとしていて客の入はほとんど無かった。一人だけ常連と思わしき老人がいたが焼き魚をメインとした和風の定食料理食べて直ぐ様帰ってしまった。
御子沢は小声で老人が食べていたものと同じ日替わり定食を注文する。
「私の知ったことじゃないわよ……」
彼女は小さな声でそう言った。それに対して加藤はため息を着き、水を飲む。
「私、あんたに息子がいるなんてちっとも聞いてなかったわ」
「ええ、聞かれなかったから」
御子沢がそう言った途端、加藤は机を叩いた。店主が驚いて振り向いたので加藤は彼に向かって両手を合わせ頭を下げた。
「……彼の車の中から鬼の面と刀が見つかったわ」
「ええ、既に報告を聞いてるわ」
「でも彼は死んでしまった。突然に」
「あなたたちが殺ったんじゃないの？」
すると再び加藤の顔が引き釣った。
「悪いけど、遥。貴方が私たちを疑ってるように私も貴方を疑ってるわ。」
「そりゃそうね。犯人逃がすし、容疑者の親だし。疑われても弁解

の余地は無いわね。でも貴方達だって二度も逃がしてる。しかも追い込んだ状況で」
「……奴は特殊部隊用の防弾素材で出来た服を着てた。内通者がいる」
「そう考えるのが妥当ね」
コトン、と音が鳴る。グラスを置いたその音の後、店主の声が響き黒いトレイに乗った定食が二つ彼女たちの前に差し出される。加藤はそれをにこやかに笑いながら受け取る。対する御子沢は相変わらずの仏頂面で自分の下へトレイを引き寄せた。
「私ね、この事件には裏で操ってる主犯がいると思うのよ」
加藤は生姜焼きを口にほおばりながら言った。
「まあ、有り得なくも無いわね」
「ええ、それでさ――」
すると加藤は箸を止めた。そして御子沢の顔を見る。
「遥が主犯だったら何の為にこうした殺人をやらせると思う？」
彼女は真剣な顔のままでそう言う。するとそれがおかしかったのか御子沢は魚を開いていた箸を思わず床に落として笑い始めた。
「何言ってるのよ沙紀、そんなの――」
「真面目に聞いてるの。」
「……そうね」
御子沢は圧倒された、加藤の真剣な顔に。彼女は落とした割り箸を机の端に置くと新しく割り箸を折って魚を口に運び始める。
「そうね、私なら――」
水を一口飲む。ゴクリという音がして乾いた喉を潤していく。
「やっぱり政府転覆としか考えられないかな……って、国家公安委員長が何言ってるんだか」
御子沢はそう言ってもう一度箸を動かし始めた。そして加藤も表情が心無しかいつも通りになった気がした。

都内の某オフィスビル。ハウンドドッグの事務所のようなこのビルで俺はコーヒーを片手に鬼武者に関するプロファイリングを見ていた。
不可思議だと思っているのは御子沢宗介の件。まだ死亡鑑定に回している最中なので詳しいことはよくわからないが俺はもう他殺としか考えられなくなっていた。
そしてもう一つの不可思議な点は左翼のトップであった日本新党の渋沢達雄が最新の被害者であったこと。これによって政界は右派、つまりは衣笠陣営に好転した。今まで左翼を匂わせるような行動をしてきた癖に何を血迷ったかということだ。
ガチャンと扉の閉まる音が部屋の中に響いた。
「……やっぱりわからないわね」
大辺が束になったプリントを持って自分の机へと向かうと机にそれをすっと置いた。
「……なあ、渋沢を殺害した奴と他の鬼武者は同一犯なのだろうか？御子沢をダミーとして使おうとするが模倣犯が誤ってその最中に犯行を起こした……無理矢理か」
「そうね、覆面だし声も出さないしただわかってるのは彼は特殊部隊用の防弾素材で出来た服を着てたってこと」
「となるとさらに政府関係者の犯行があやしくなるな……」
だが、一連の犯行に今まで同一性があったもののそれが急に消え失せた。これを説明する手立ては今の俺には無い。
俺は資料を事務机の上に置き、コーヒーを飲み終えたカップも右手の近くへと置いた。カップの中はほんのり茶色く染まっている。
「模倣犯か――」
大辺は言葉を濁す。俺にはその言葉の続きが気掛かりで机を中指でトントンと叩きながら「何か知ってるのか？」と聞いた。
「実はね、鬼武者の犯行と思われる事件が殺人に留まらず増え続けてる。それも誰の犯行なのか分からない。まるで何かのブームのように犯罪が行われてる。」

「それが模倣犯ってか」
頬杖を突く。机に置かれたモダンなデジタル時計は暖房の聞いた室内の温度と時刻を指し示す。
「それにまた言葉が残されてたしね」
「なんと書かれていた？」
『人間が真に悪くなると、人を傷つけて喜ぶことのほかに興味を持たなくなる。』大辺はそう書かれたカードを撮った写真を見せる。カードは死体の横に血に濡れながら置かれていた。
「またゲーテか……」
格言と反省。奴は何を考えているのか。
この言葉は誰に対した物なのか。政府への批判かそれとも自分に対する卑下か。恐らくは前者だろうが。
何故ゲーテなのか。これが何かのメッセージという事は間違いない。俺は昔読んだゲーテの本を思い出そうとするもゲーテなんて大して読んだことも無かった。

大辺に続いて拳隆と嶺崎がオフィスビルへと戻ってきた。二人は先日の渋沢達雄の殺害現場へ向かい、現場検証を行なっている警察にお邪魔して何か掴めればと思っていたが結局収穫は無かった。
わかってるのは鬼武者による犯行ということ。ゲーテの言葉が残され、胸には三つ巴が刻まれているということ。そして奴は政府関係者の可能性が高いということ。それだけだ。
捜査の進展の無さは結構なもので既に公安から催促のお達しが来ている。ＳＡＴが逃がしたくせに何を言っていると思うがそもそも今の対立下の状況では俺たちを気に入らない連中もいる。そういう連中にとっては事件を解決することが俺たちの存在意義だということだ。
暖房の音がビルの中に響く。様々な機械の動く音だけがこの空間を満たしている。

「なにこれ――」
大辺がキーボードを叩く手を動かし口を抑えた。表示されているのは文字列。その数は尋常ではなく専門外の俺たちにはさっぱり分からない。
「何があった？」
「……何処かからアタックされてる！」
サーバーがエラーを起こし、悲鳴を上げる。文字列はさらに増加し、勝手にウィンドウを開き始める。
「ちょっと、どうなってるのよ……」
大辺は必死にキーボードを叩くが肝心のパソコンは何の反応も起こさず黙りを決め込んでいる。
「信号を受け付けてない……データが盗まれる前に回線を落として！そこのケーブルを切るの！」
俺よりも先に拳隆が気づく。嶺崎は何か分からずその場であたふたしている。
床のカーペットをどけ、金属製の板を開けた中に多数のケーブルが詰まっている。
「どのケーブルだ？」
「奥の一番太い奴！」
ケーブルをかき分ける。黒いケーブルに赤いもの、青いもの。まるで爆弾の中身のような中に一本の太いケーブルを見つけ出す。
拳隆はポケットからナイフを取り出そうとする。しかしジーパンのポケットという奴はなかなか取り出しづらい。
「早くして！データが盗まれる！」
「分かってる」と拳隆は言うがそのまま文字列は増え続ける。画面を見ていた俺も流石にどうしようもないとケーブルの方へと行く。
「どけ」
俺はそう言うとハンドガンを引き抜き、銃口をケーブルに押し当てる。
引き金を引く。銃声と共にケーブルが引き裂かれる。途端、パソコ

ンの電源は切れオフィスビル全体が真っ暗になった。
暗くなったビルの中に光が直接差し込み始めた。窓ガラスが割れたのだ。銃声と共に割れていくガラス、その間に日光ともう一つの光が差し込む。
「どういうことだ、何が起きてる？」
「分からないわよ！」
大辺は机の下に身を隠し、護身用の銃を机の引き出しから手探りで取り出す。拳隆は嶺崎を覆うように床に倒れていた。
銃声が止む。俺はおそるおそる窓から外をのぞき込んだ。その下、路地には黒いタクティカルベストとＭＰ５Ｊと決め込んだフル装備のＳＡＴが待ち構えている。彼らは俺が見えた途端、トリガーを引き銃弾を発射する。咄嗟に俺も身を隠すが頬を少し掠った。
「ＳＡＴだ。ＳＡＴの連中がここを取り囲んでる」
「何でＳＡＴの連中が――」
拳隆が言いかけた途端、ビルの中に爆音と共に衝撃が響いた。体が縦に揺れ天井からは破片と埃が落ちてくる。
「分からないが、逃げるしかないな」
俺はそう言うと銃を引き抜き右手で持つ。そして左手にはワイヤーガンを持った。
課長が居ない今、ハウンドドッグの指揮系統は俺に委譲された事になる。これで誰かが死んだら俺の責任ということだ。無論そんな責任は御免被りたい。
「いいか、各自の判断で脱出しろ。突破口は俺がある程度開いておく」
木製のハンガーに掛かった黒いコートを取る。袖を通しながら俺は壁際へと移動する。
「……合流地点は追って連絡する、それまで生きていろ！」
トリガーを引く。ワイヤーが隣のビルへと射出され、高性能接着剤

が衝撃に反応してコンクリートに接着した。もう一度トリガーを引く。機械音と共に巻き取りが開始され、俺は窓のサッシを蹴って外へとでた。
その途端、俺の体は空中で無防備となった。いや、そう見えたのはＳＡＴの連中だけだろう。
空を駆け抜ける中、鉛が俺に向かって放たれる。俺もグロックから銃弾を発射するが５階から一階で移動しながら撃っているとなると連射の効くＭＰ５の方が圧倒的に有利である。しかしそれは彼らからの主観的な考えであって彼らには俺が特殊素材の衣服を身に付けてるとは思いもしなかっただろう。
あの鬼武者が着ていたモノと同じ。皮肉だが彼も俺もＳＡＴから追われる特殊生地のコートを来た殺人者というとこまで一致している。向こうのビルに足が着く。その途端に俺はもう一度トリガーを引いてワイヤー伸ばす。降下していく。
弾丸を振り払いながら、生きていた人間をを肉塊に変えながら。

追っ手を振り切った俺は少しでも見つからないようにと人ごみの方へ行こうとした。新宿やら渋谷に行けばある程度時間稼ぎにはなるだろう。
出来るだけ人と接触したくなかったので電車は使わなかった。かといって車を取りに行くような暇はあの時なかったし検問を行なっている可能性だって十分にあった。つまり俺は徒歩で来たわけだが何故そこまで慎重に行動しているのか。その理由は渋谷のスクランブル交差点で一際目立っているあの巨大なディスプレイを見ればわかるだろう。
映し出されているのは政治のニュース。そしてその内容というのは衣笠の悪行について辛辣に語ったものだった。ある事無い事マスコミはわめきたてている。それはつまり俺たちの存在も世間に露呈したという事でそれもトップニュースに上がっていた。

汚職を揉み消すための最低の組織。随分な言われようだと思いながら信号が青に変わった交差点を歩く。
道行く人、ひとりひとりが追っ手のように見えた。それほどのプレッシャーというか何とも言えない威圧感をかんじる。気のせいなんだと、気にしすぎなんだとは思う。けれども世間からすれば俺達は今最低最悪の社会悪に過ぎない。
ついさっきまで連続殺人犯を追っていた男は今、最低の犬として、殺人鬼として晒されている。
青信号が点滅する。俺は早足で横断歩道を渡った。

『若きウェルテルの悩みって知ってる？』
その言葉を聞いたのはいつだったろうか。
彼は懐古する。
若きウェルテルの悩み。ゲーテによって書かれたその本は当時ヨーロッパでベストセラーとなり、そして多くの人を殺した。
人間の心というのは動かしやすい。この本で青年ウェルテルは叶わぬ恋に絶望し、自害する。
これを読んだ者達はそれを真似、自害した。
ウェルテル効果。という言葉がある。これはある著名人の死が他者に影響、伝達し自殺させるというものだ。
彼はゲーテになりたかった。彼の正義を伝達させたかった。
だが彼女のやり方は擬似的な模倣犯の創造に過ぎなかった。
彼は絶望し、そして苦悩した。

T

he post-breakup

File No，4　At that time I，~The boy

雨が降り始めた。俺は取り敢えず近くの路地裏に身を潜め小さな古ぼけた屋根で雨を凌ぐ。この時間帯の雨だから夕立だろう。すぐ晴れるとは思うがここで雨宿りしてる所でＳＡＴにみつかったらどうしようもない。

そもそも何故俺達は追われる身になったのだ？衣笠のやってきた事が世間に露呈した。それは分かる。しかし、なぜそれがマスコミの目に触れたのかがわからなかった。ただ一つわかるのは、この政治家たちの争いは左へ傾いたということだ。

携帯電話の電源を切る。うかつに通話して位置がバレたらどうしようもないしＧＰＳ機能で発見されることだって十分にありえるからだ。しかしながらそうした場合散り散りになったメンバーとはどうやって連絡を取ればいいということになる。

ふと、俺はコートを見やった。濡れたコートを手で適当に払うとポケットの中で何か凹凸のような物を感じた。もしやと思いポケットを探ると案の定無線機をいれたままにしていた。

これは好都合だと俺はコートの襟元にマイクを取り付けワイヤレス式のカナルイヤホンを耳へと引っ掛けた。小さなボタンを押すと青いランプが光り、電源が入ったことを知らせる。

しかし聞こえてくるのはノイズだけで以降、俺が問いかけても何かしらの反応を見せることは無かった。

拳隆はＳＡＴに襲われる中、嶺崎を連れて脱出していた。何発か銃弾を受けたがどれも致命傷という程ではなく適当に布を当てておけば彼にとっては大したことは無かった。
ザァっという音と共に雨粒が地面へと落ちていく。二人は人ごみの多い土地というよりもこの時間はあまり人のいない飲み屋街を歩いていた。ここへときたのは勿論拳隆の采配である。
「拳隆さん、ここでどうするつもりなんですか？」
嶺崎が問う。街はガランとしており雨の音がガンガンと頭に響きわたる。
「――着いたよ」
そういうと拳隆は小さな古ぼけた店の前に立った。扉は年季の入った木製で酔った親父が蹴飛ばした跡が残ってたりする。
拳隆はその扉を開ける。カランコロンと乾いたベルの音がして二人は入る。
「マスター、ちょっと身を隠させてもらうぜ」
彼はカウンターに立つ年老いた男にそう言った。
「ほう、珍しく来たと思ったら女連れかい。ずいぶん成長したもんだねぇ」
「同僚だっつの。取り敢えず水を」
「あいよ」
店主がそういってボトルに入った水を拳隆に手渡すと彼は奥の席へと向かった。奥には一人の男が新聞紙を持ってコーヒーを飲んでいる。スピーカーからは７０年代アメリカの懐かしいポップスが流れているにも関わらずその男はイヤホンを耳にしてラジオを聞いている。
「久しぶりだな、翔」
男はそう言った。初老ぐらいの男はイヤホンを外し、ポータブルラジオの主電源へ手をかける。
「あんたなら何か知ってると思ってな」
「ふむ、しかしながら翔。それよりも彼女はいいのか？」

男は立ったままあたふたしている嶺崎を顎で指し示す。
「いいのさ、それより何か知ってるのか？」
「いや、俺が知ってるのは公安に何か黒い繋がりがあるってことさ」
「はっ、あんたも相変わらず素直じゃないね」
拳隆はそう言うと水を飲み、財布からいくらかの金を取り出すとそれを男の座る机へと置いた。

雨足は弱くなる気配は無かった。曇天の空は太陽を隠し、雪が降るか振らないかの境界線の冷たさの風が吹く。俺は雨宿りはやめた。傘を刺した人々をかき分けて横断歩道を歩く。どこまで行くか、どこへ行くか。そんな物は決めてなかった。永遠に終わりのない道を自分の足で歩くだけ。追っ手が見当たらないのが不幸中の幸いといったところだろうか。
ぽつり。俺の前髪からコートへと雨が垂れる。特殊素材で出来たコートは材質上水を弾くらしく雨粒は形を保ったまま地面へと落ちた。景色が都市部から住宅街へと変わっていく。道には緑が増えてきて俺の目の前には大きな橋が現れた。橋の下の川は雨の影響かやけに水かさが多く、濁った水の臭いが橋の手前に居た俺の鼻腔をもくすぐった。
俺は橋を渡ろうかと戸惑ったが結局右折して河川敷を歩くことにした。緑地には濡れたダンボールが点在していて体の汚れた浮浪者達が雨で体を洗っていた。社会の底辺と呼ばれる彼等だが実際はどうなのだろうか。俺たちも社会的には良い面もあったがそれは一時的

なもので総体的に見れば混沌を生み出す装置の歯車に過ぎなかったのかもしれない。
……やめよう。只でさえ気が滅入ってるのにこんな事を考えるのはさらに気を落とさせる。
コートのポケットに手を突っ込んだ。暖かくはない。でも濡れるよりはマシだった。

途端、視界に何かが映った。それは河川敷の上の土手道を通る俺を阻むかのように立っていた。
ぽとん。雨粒がまた落ちた。髪の毛から落ちたのではない。二本の角から水滴が落ちている。
そうだ、今俺の前には白い鬼がいる。彼のコートも俺の物と同じ材質なのか水を弾いていた。彼の手は外に出され、左手は日本刀の鞘を持っていた。
「……今度のターゲットは俺か？」
彼は何も言わない。黙ったまま１ｍｍも動かない。
鬼の面には涙のように水滴が流れる。

「――助けてもらいに来ました。」

鬼はそう呟いた。その声は少年のようなあどけなさを持ちながらも思春期をくぐり抜けた青年の垢抜けた感じもした。

オートロックシステムは働いた。自己防衛システムも作動している。

万が一アクセスされてもデータは削除されるように仕組んである。
でも彼女は不安だった。
大辺未来。ハウンドドッグのオペレーターであり情報分野を担当する彼女はこの状況下でひたすらに最悪のケースを想定し現実と向き合った。
下町の商店街。電気屋に並んだ薄型テレビからは衣笠衛の事と自分たちの事を永遠と流し続けている。この報道はさっきも見た。そんな物ばかりが彼女の目と耳を通じて頭の中に入ってくる。
現段階ではハウンドドッグに関する情報は『そういう組織が存在した』という事だけで構成員については漏れていないがデータが盗まれるか政治家が口を開くか。そちらかで決着が着く。そうなれば彼女は本当にお尋ね者となるわけだが彼女もそうはいかない。
彼女が唯一頼れる存在。彼女はその電器店へと足を踏み入れた。
いらっしゃいという年老いた男の声が聴こえる。しかしその男は彼女の顔を見たとたんしかめっ面をして「出て行け」と語気を強くして言った。
「――わかってるんでしょ、私がどうしてここに来たのか」
「……」
男は黙って後ろを向く。
「分かってるからこそ出て行けと言っている。俺はもう引退したし一度掴まった身だ。それでまた娘に迷惑をかけるなんて出きっこない」
「迷惑って……私は今困ってるの、お父さんの力が必要なの」
男は黙ったままで居る。
彼女、大辺未来には男で一つで育ててくれた親父がいた。しかし彼は情報保護だのプライバシーだのと警察に言われて掴まった。彼はハッカーだったのだ。元は大手ソフトウェアメーカーに就職していた。けどその職場でやらされていたのは他社のデータを盗むという物だった。全ては上司に命令された事。しかし上司はお咎め無しにも関わらず彼の父、そこにいる男は逮捕された。

彼女は激怒し、警察とその上司への復讐を硬く誓い彼の残した膨大なデータからハッキングを身に付け警察へのハッキングを開始した。そこで彼女はある計画を目にしたのだ。『ハウンドドッグ計画』秘密裏に事件を処理する特殊警察。彼女はこの情報を公開すれば警察を転覆させ父の仇を討てると思っていた。でも彼女はミスを犯した。警察にバレたのだ。

彼女は重犯罪者として拘留され、ある女性の下へと送られた。それが今の上司、加藤沙紀。彼女は私の父を釈放してくれるといった。その際に後ろにいたお偉いさん達を無理矢理黙らせた彼女の姿を大辺は今でも覚えている。ただし交換条件があった。それがハウンドドッグへ所属すること。大辺の力を借りる代わりに彼女は父を釈放すると言ったのだ。

そして未だに彼女の父は娘の未来を絶ったという事に対して強い後悔を持っている。それは親からすれば仕方ないことだが彼女からすれば無駄なものだった。

「ねぇ、お父さんなら何か出来――」

「俺はもう何も出来やしない！」

彼は叫んだ。周りにあった商品がすこし揺れたような錯覚に陥る。でも彼女は諦めなかった。紙切れを一枚レジの上に置く。

「私は立ち向かうから」

大辺は帰り狭間に後ろを振り向いたが彼は俯いたままだった。

「……お前の部屋だ。」

彼女の足が止まる。

「昔のお前の部屋に大学に納入予定のサーバーがある。それを使え」

「……ありがと」

そう言うと彼女は振り向き、レジと陳列棚の合間にある小さな階段を掛け登った。

「助けて貰いに来た……だと？」
俺がそう言うと鬼はコクリと頷いた。彼は鬼の面を付け恐らく俺と同じコートを来ている。俺とは違って色は白だ。しかしながら幾多の人を殺める為に使われたそのコートはほんのりと赤く、どこか気味悪かった。
「笑わせるな。俺はお前を捕まえるか殺さなきゃならないんだ」
右側に填めたレッグホルスターから銃を引き抜く。何だかいつもより少し軽かった。恐らくマガジンに装填された弾数が相当少ないのだろう。かといって予備のマガジンはどこかというといつものビルへ置きっぱなしで今から取りに行ったらＳＡＴに返り討ちに遭うのが目に見えている。
「撃ったところで俺は殺せないですよ」
「そのコートか。合間を突けば良い話しだ」
俺がそう言うと彼は刀の柄を掴み、鞘から引き抜く。河川敷の芝へと投げ飛ばされた鞘は斜面で転がったあと浮浪者の居住するダンボールに当たって動きを止めた。
「そうですか、残念です」
途端、俺は彼から異質な物を感じ取った。それは殺気とは違った物でどちらかと言えば悲しみだとかそういった哀の感情に近いのかもしれない。
覚悟した。そして引き金へと手を掛ける。トリガーセーフティが俺の指を微かに反発しながらも解除される。対する鬼は刀を真っ直ぐに構えて俺を見つめている。
雨足は少しづつ弱くなり始めている。そろそろ雨となり降やむだろう。
彼の頭を狙う照準器、今撃てば彼を殺すことが出来る。でも俺には

それへの確信がもてなかった。恐怖にも似た感覚が俺の指先からじわりじわりと蝕み始め段々と照準がぶれていく。
一閃。白金の光りが俺の前を通った。咄嗟に腕を突き出した俺はなんとか刀から身を守った。刃は確実に俺の左腕にあたっているも防刃加工によりコートは一切斬れていない。だがしかし振り下ろした際の力というものはとんでもなく、結果的には峰打ちとして俺の左腕にジーンとした痛みを残した。
その体制のまま俺は懐に向けてゼロ距離で一発、鉛を食らわせた。凄まじい耳鳴りが起きるも案の定彼の服にも傷は付いていない。それどころか俺の銃はスライドがオープンしており残弾がゼロだという事を示していた。
急いでレッグホルスターにそれをしまうと腰のナイフシースからコンバットナイフを引き抜きそれを構える。
彼との距離は一旦離れた。お互いに相手の様子も見ているのだ。
今の彼も俺も武器は刃物のみ。しかも両者防弾防刃の素材で出来たコートを着用している。
勝負に出るなら早くやらなければ。俺はナイフを強く握り右足を出す。それと同時に彼も動き出す。
白と黒。雨の中で二つが交じり合った。
日本刀とナイフ。刃同士がぶつかり合う。金属の擦れる嫌な音を出しながらナイフの短い刃に圧力がかかる。その圧力は刃、グリップを伝い俺の手に伸し掛かるってきた。
ナイフと日本刀ではハンデがありすぎるのか俺はそうそう彼には近づけなかった。言うまでもなくナイフと太刀ではリーチが違いすぎる。ナイフにはナイフの利点があるがリーチの問題はどうにもならない。俺達はただただ刃を振るった。それが相手に対して致命傷を負わすことが出来ないとは分かっていた。俺の体には打撲が相当数出来ているだろう。それは同時に彼の体の状態も現している。もはや殴り合いに近かったのではないだろうか。
「どうして貴方は、こうも冷徹に――」

彼が日本刀を真っ直ぐに振り下ろす。俺はそれをギリギリのタイミングでなんとかかわすと彼の脇腹に目掛けてナイフを突き出した。
「それはお前が言えた事ではない、お前のような殺人鬼が。」
接触する。だが手応えはない。あのコートの合間を縫って攻撃を行うというのは俺にとっても彼にとっても至難の技だ。
「俺は殺人鬼じゃない！俺は父さんの仇を――」
刀の柄で俺の背中を殴る。背骨を殴られた途端、全身に嘔吐感のような物を感じられた。
「どのみちお前が殺った事の変わりはないだろう、お前は何人の人を殺した？それは政府転覆の為か、それとも他の理由か？」
距離を取る。１ｍ、２ｍ……彼との距離は開き、俺は態勢を立て直す。でも俺は彼の回答に拍子抜けしてしまい、ナイフを上手く構えられなかった。そう、彼の答えは意外な物だった。

『俺は政府転覆なんてどうでも良かった。俺は取引をしただけだ！』

後ずさりし、ナイフを構え直すと鬼の面を見て俺は言った。その鬼の目は小雨に濡れて半べそをかいてる見たいだった。
「取引とは何をしたんだ？」
すると彼は刀を納め、両手を上げて言った。
「僕は正義を為し、父さんの仇を討つ。その手助けをする代わりに鬼武者という犯罪者を作り、擬似的に模倣犯を作りあたかも国政が左翼に乗っているように見せる。その鬼武者になれと言われた」
「誰にだ？」
俺はこの時ある二つの事に気づきかけていた。いや、片方は気づいていた。彼の正体が分かった気がしたのだ。
「――御子沢遥国家公安委員会委員長。そういえば分かりますか？」
俺はそこで全てが合致した。左翼のリーダーであった渋沢が何故殺害され、どうして俺たちがＳＡＴに狙われたのか。そして鬼武者という架空の英雄的な犯罪者を作り出したということ。それがゲーテ

の言葉の現す意味だったということも。
「……分かった、協力しよう――」
俺はナイフをしまうと右手にはめていた防刃グローブを外す。すると彼もそれを察したのか地面に落ちた達を俺の方向に蹴飛ばした後、白い手袋を外した。
握手をする、さっきまで殺そうとしていた相手に。いや、今から5年前に巻き込んでしまった彼に。

「佐藤大樹。君なんだろう？」

俺はそう言った。その途端彼は固く外さなかった面を外す。その下にはあの時のあどけなさを残しながらも成長した彼の姿があった。

「それで、君はこれからどうするんだ？」
雨が止んだ。刀はもう彼の下へ戻っている。俺達は敵対すべき相手ではないと分かったから。確かに彼は殺人を犯した。しかしそれは5年前に起きた擬似クーデター事件で職務から逸脱した正義感により事件を肥大化させた佐藤大樹の父が政府の手によって暗殺されたことが原因だった。
裁判所で有罪判決を言い渡され、彼が刑務所に入れられて俺はあの事件は終わったと思っていた。しかし衣笠は秘密を知った者は殺さねばならないと考えた。それが俺たちのような人間ではなく政府に牙をむいた刑事ならなおさらだ。
「――御子沢の所に行きます。」
彼は力強くそう言った。
「行ったところでどうする。俺も、君も今では立派な犯罪者だ。結局御子沢は自分を英雄としてプロデュースして君は捨て駒だったということだ」
そうですね。と佐藤は力なく言った。それから少しして彼は立ち上

がった。
「結局、俺は復讐者なんですよ。もう、後に退けない。だから御子沢を――」
その言葉を聞いて俺は即座に彼の襟元を掴んだ。特殊素材のコートは弾丸が効かないとはいえど簡単に襟首を掴む事が出来た。
「いいか、お前はまだ更生出来る。俺とは違う」
「何を言ってるんですか、俺は――」
俺は彼の襟首から手を離した。なんだか自分が惨めに見えたのだ。
「亜久さん……なにかあるんですね？」
「――聞きたいのか？犬になる前の殺人鬼の話を」
俺は卑下するように言った。でも彼は曇のない目で俺を見つめた。それが更に俺を惨めにさせたがそんな目を見たら大人げないマネをするのは阿呆に思えてしまった。

Ｇｏ　ｂａｃｋ　ｉｎ　ｔｉｍｅ．

File No，5　Blood，~It can't go back a

俺があの時知った事は二つ。
血は洗い流すことが出来るということ。しかし血は血で洗う事が出来ない。
そしてもう一つは固まった血は落ちないという事。
俺はもう手どころではなく体まで染まりきった赤を洗い流す事は出来ない。奴とは違った、あの時のアイツとは――

深夜。古ぼけた貸倉庫には大型のファンの間から街灯の僅かな明かりだけが灯っていた。
遠くからおびただしい数のサイレン音が聴こえる。その音の集合体は一曲の交響曲でも奏でるかの如く重なり合い個々のサイレン音が同じではなく、それぞれ違った性質を持っているかのように響いた。

少年は倉庫にいた。彼は両手を後ろで縛られ両足はテープのような物でぐるぐる巻きにされている。足のほうは何とか力を入れれば外せるとは思うが今の彼にそれは無理だった。
彼は衰弱していた。父も、母も目の前で殺され臓器売買の為に生かされた存在。それが『今の彼』だった。
口もガムテープで抑えられ表情はその腫れぼったい泣きじゃくった跡の残る目から推察するしかない。でもその目だけからでもわかるように彼の目は生気を失っている。
コツン、と倉庫の中に音が響いた。黒いトレンチコートを着た男が口に火のついていないタバコをくわえて少年の方へと歩いて来る。
彼の手にはオイルライター。冷たい秋風に火を消されまいと左手を

風よけにしながら火をタバコへと近づける。
「気分はどうだ？」
男は口から煙を吐き出し、少年に吹きかけるとそう言った。
「……」
「答える気力も無いか――それッ！」
途端、男は少年の脇腹に革靴で蹴りをいれた。それには衰弱していた彼も思わず生理的に声を漏らし、逆流した胃液をむせながら地面へと吐き出した。
男は「汚えな」と侮蔑の言葉を浴びせながら割られた窓から外を見る。外にはパトカーが何台かこちらに向かっているのが見えた。
それを確認すると男は少年を引きずるように倉庫の外へ運び出す。そして黒塗りのセダンのトランクへ少年を押し込み、運転席へと向かう。その途中、彼は携帯電話を取り出すと誰かに掛けた。何回か呼出音がした後に老いた男の声が聞こえた。
「おい！どういう事だ、取引はどうした！？」
男は怒鳴るように言うが向こうは何も言わない。舌打ちをするこ彼は通話を切って携帯電話をコートのポケットにいれた。
それと同時、黒塗りのセダンは四方向から強烈な光に挟まれる。警察だ。
彼はそれを見てため息を着くと両手を上げて車から出た。

「お手柄でしたね、加藤管理官」
髪の毛を綺麗に七三に分けた昔のサラリーマンのような男がそう言った。
省庁から現場へ行こうと階段を降りていた加藤沙紀。彼女にその言葉は邪魔以外の何者でも無かった。彼女はまだ事件を解決出来ていないからだ。
「臓器バイヤーを逆手にとって逮捕に踏み切るとは――」
男は尚も加藤の事を褒めちぎるが彼女の耳にはその言葉は一言たり

もと入っていなかった。彼女はただただ足を動かす。まだ被害にあった子供は親のいないまま取り残されている。彼女にとって被害者全てに恒常性を取り戻させる事が事件の解決であった。

白いつまらない空間の中に少年はうつむきながら座っていた。カウンセラーの男性が彼に近づくも拒絶するように何も話さず、ただしっとうつむいたまま下を見ているだけだった。
「んでー、彼に関する情報は？」
「ええ、まとめてあるんですが……」
加藤の部下に当たる捜査官は言葉を濁す。
「何？後ろめたいことでもあったのかなー？」
「いえ、そうではなくて――」
すると捜査官は一枚の資料を見せた。
「……なにこれ？」
渡されたのはほぼ白に近い紙だった。そこに書かれているのは推定年齢、性別、健康状態それだけ。
「名前や戸籍情報は一切無いのかしらん？」
加藤は腰に手を当て、少年のいる部屋を見ることができるマジックミラーにもたれ掛かった。
「それが、厚生省のデータバンクにも一致する情報が無くてですね……」
「まさにゴースト――か」
彼女は青白い少年の顔を見ると皮肉るようにそう言った。

少年の目は反抗的でもなんでもなかった。その目からは何も感じられない、何も感じていない。無だけが伝わる。
加藤は高いヒールの靴で床をコツコツと鳴らしながらドアの方へ歩いた。心理カウンセラーが加藤に一礼すると彼女はカウンセラーに

手を振って応え、部屋へと足を踏み入れた。
少年は俯いたまま何も変わらない。加藤が「こんにちわぁー？」とか言ってみたが決して動じなかった。呼吸の音と僅かな心音だけが部屋に響きわたる。
マジックミラーはこちらからは見えず無効で部下たちがどんな顔でこっちを見ているのか分からない。しかし今の加藤にはどうでもいいことだった。
「あー……ちょっち待ってくれるかな？」
そう言うと加藤は少年の反応を伺ったが彼はやはり微動だにしなかった。仕方なく加藤はポケットから携帯電話を取り出す。登録された電話帳のマ行から御子沢遥という名前を見つけ出すと彼女はそこへ電話を掛けた。
プルルという音が耳へ響き、僅かに耳とスピーカーの間から漏れる。ややあって女性が電話に出た。
「あー、はるかぁ？ちょっち訪ねたいことがあんだけどぉ――」
「――沙紀、今会議中なんだけど……」
「こりゃ失敬」
そう言うと加藤は一方的に電話を切る。「待ちなさい！」とか聞こえたが彼女は無かった事にした。
「んで、君の事を教えて欲しいんだけどぉ？」
少年は何も言わない。
見た目中学生ぐらいの少年。平均的、もしくはそれよりも少しやせ細った体には適度に筋肉がついていて虐待を受けていたようにしては比較的軽傷に見えた。おかしい。何故こんな単純なポイントに皆気づかない。
すると途端彼女の携帯電話が鳴った、部下からだった。
急いでその電話に出ると第一声に部下の男が息切れした声でぜぇぜぇ言いながら言った。「被疑者が死亡した」と。

「どういうこと？奴は拘留中だったはずよねぇ……舌でも噛んじゃったー？」
加藤は部下の捜査員とは対照的な面持ちでそう言った。
「いえ、そうではなくて――」
捜査員がそう言うと加藤は「じゃあ何なのよー」と唇を尖らせながら言った。
「内臓が――破裂してたんです」
その言葉を聞き、加藤の顔からは先程までのふ抜けた感じが無くなった。
「……それってどういうこと？」
「いえ、まだ死亡鑑定前なので詳しいことは分かりませんが腹部に比較的最近の物と思われる傷が何箇所か」
加藤は顎に手を当てると下を向く。
「奴が殺した相手ともみくちゃになった痕跡ってあったかしら？」
「えっ？殺した相手ですか？」
「そうよ、３０歳ぐらいの男女がぐちゃぐちゃにされて殺されたはずだけど」
加藤はそう言って事件の概要を話したが捜査員は何も知らないと答えた。おかしい。確かに彼は前回の密売人の逮捕には参加しなかったが情報は知れ渡ってるはずだった。
「――あの、よく分かりませんが鑑定結果が出たらお知らせします。それでは」
彼女の部下はそう言って電話を切った。彼女は事件の事について引っ掛かってならなかったが今は目の前の少年をどうにかすることが先決だった。
戸籍だとか情報は一切ないらしいが取り敢えず彼は殺害された男女の間に生まれた子供である可能性が高かった。だとすれば彼は目の前で両親を殺され、犯人に引きずり回され、そして――
想像しただけで悪寒が全身に走った。電撃のようなしびれが恐怖を具体化する。

加藤は少年の顔を見た。彼女からは少年の顔が少し違って見えた。笑っているように見えたのだ。

ややあって加藤は諦めるかのように部屋を出た。その後も何時間も粘ったが彼は一向に口を閉ざしたまま。ＰＴＳＤか何かの一種じゃないかと心理カウンセラーに聞いてみたが可能性は十分に有り得るが現段階では何も言えないと言った。

彼女はそのまま少年の保護されている施設を出た。地下には小さめの駐車場があり、彼女はそこに止めておいた自分の車のロックを外し、運転席へと乗り込む。

するとその途端に携帯電話がピリリリリとプリセットされた何の変哲も無い電子音を鳴らした。液晶画面を見るとそこには御子沢遥と表示されている。恐らく会議が終わったのだろう。

今、日本は重要な時期を迎えている。長きにわたって続いた総理大臣が１年ずつ交代していくという状態。それにようやく終止符が打たれるような政治が行われ始めた。それは決して「良い」意味で終止符が打たれる、善良な方法で政治が変わるのではない。

国会という権力が、国会議員という、内閣という自身の虚栄心、繁栄心のみを優先し悪政を繰り返した者達が形的に一掃され、隠されることによる完璧な独裁が始まる。

近年当選した衣笠衛は上っ面では官僚と今までの政治体制を目の敵にし、あたかも自分が正義だと言わんばかりの演説を行い、改革を推し進めると豪語していた。その結果がこれだ。

電話を取ると第一声に御子沢は言った。「決まってしまった」と。

それを聞いて加藤は何のことなのかはわからなかったがその直後に全てを理解する。

加藤は何が起きたのかを御子沢に問う。

「――だから、決まったのよ」

彼女はそれの一点張り。

「だーかーらー。主語がないわよ遥ぁ？」

「……ハウンドドッグよ」
「は？」
加藤はポカンとした。ハウンドドッグというと猟犬の一種だ。主に獲物を追い詰めたりする際に使われるがそれが一体何を意味するのかがわからなかった。
キーを回し、エンジンをスタートさせる。ほのかなガソリンの臭いが花を突く。
「ハウンドドッグって一体――」
加藤はエンジンをかけ、メーターを見た後に何かに気づいた。エンジン音は自分の車だけではないということ。だがしかしながらこの施設は一部役人にしか知られていない重度の精神疾患を持った者を介抱する――いや、閉じ込めるといった方が表現としてはあっているのだろう――施設であり、今は加藤以外地下駐車場に止めている者はいなかったはずだ。
エンジンの音のする方へ振り向く。彼女の向かって右側にその車はあった。黒塗りのセダン、如何にもお偉いさんが乗っていそうなその車の中を見る。そこにはスーツの男が一人と――青緑の患者衣を着た少年。先程の『彼』だった。
「はっはーん……遥、ハウンドドッグって前に言ってたアレ？」
「そうよ、アタシ何度かオファーしたハズだけど沙紀ったら尽く断ったじゃない。御陰で最低の組織に最低のゲス野郎が就いたって訳。その結果がどうなっているのかは今の沙紀の目の前にあるハズよ」
「ええ、その通りねぇ……。公安にかけあっておいてよ、アタシひとりじゃ無理だっつの」
そう言うと御子沢は小さくため息を着いた。
「一介の国会議員に何が出来るかなんてわかんないけど、やれることはやるわ」
「んじゃー頼んだわよ」
加藤はそう言って通話を切るとアクセルを踏み込んだ。

ハウンドドッグ。この組織は当時としては（今もだが）革新的だったのだろう。これまで国会議員が必死こいて隠してきた物を隠す専門の特殊警察。そして衣笠はマスコミへの情報統制を行い、それも全てハウンドドッグを始めとする各諜報機関によって隠蔽された。この組織が出来たのはさほど昔ではなくまだ１０年経ったぐらいだ。設立当初は国会内部でも波紋を呼んだがいざ極秘に行われた審議会で可決で通ってしまえば誰も何も言わなかった。自分たちにとって都合のいいシステムだからだ。

いくら何をしても許される。それは社会の基本的なルールをねじ曲げることによって社会を形成する。隠されることによる新たな社会の形。あらゆるモノにプライバシーがあり、それが隠されるように悪事にも隠される権利がある。その結果として今の日本がある。今の日本は理想的な民主主義国家に見えるが実情は国が甘い汁を啜る為に存在する独裁国家。それは変わりもしない事実であり、ここ１０年一切変わらない恒常性をも生み出そうとしていた。

加藤の車はハウンドドッグの車を思われる黒いセダンから約１，２台離れた所から追いかけていた。向こうも警察だし何よりもお役人と政治家御用達の特殊部隊。彼らに接触するのには細心の注意が必要だった。

そう考えると遥はある意味異端者なのかと加藤は思いふけりながらハンドルを切る。

あの少年をどうするのか、加藤にはわからなかった。だがしかしひとつだけ言えるのは彼は捜査本部の管理下で保護されている身であり政府の犬たるハウンドドッグには関係ないということ。

そんなことを言ったら「無用な正義感だ」と言われ、ハウンドドッグに殺されるだろう。そんな事目に見えている。

ハウンドドッグは正式に認められたのが今日なだけであって今まで

もわずかながら加藤の耳にもその噂は届いていた。『最低の警察組織』があると。
もともと彼女は警察自体に正義があるとは思ってなかったしハウンドドッグがいくら非道な組織であろうと自分たちが言える立場では無い。思い起こせば昔の警察といえば中学生や高校生も習うように無理矢理自白させ、冤罪の犯人を捕まえたりとやりたい放題だった。それが今でも続いているのか？と問われれば加藤は「ＮＯ」と答えたい所だがそうはいかない。限りなく白に近いグレーなのだ。あるとは断定できないが必ずしも無いとは言い切れない。
だがハウンドドッグはそれが違った。いくら殺っても良い。それは今彼女が追っている車のように真っ黒なのだ。

その車は途端に細い道へと入った。車が一台通るか通らないか程の。加藤はもしかして尾けていたのがバレたかと思ったが今更あた戻りは出来なかった。
薄汚れた灰色の塀の間を通る。彼女は車体を擦ってしまうんじゃないかとビクビクしながらゆっくりとアクセルを踏み込む。
ハウンドドッグと思わしき車はもうこの細い道の終わりまで出ていて比較的人通りの無い大通りへ向かう。加藤は勝負に出た。
一気にアクセルを踏み込む。大通りに出たらあのセダンの前に出る。そして少年を連れ戻す。そう言う寸断だった。
だが前方の黒いセダンは動くのをやめた。しかしアクセルを踏み込んだ加藤の車はそう簡単に止まれる訳ではない。車は急には止まれない。彼女は管理官になってようやくそんな事を理解した。
ドン！フロントガラスが割れ、エアバックに顔を埋める。予想は出来ていたとはいえ痛かった。シートベルトの重要性というのを再認識した加藤を脳震盪を起こした頭を抑えながらシートベルトを外し、衝突でロックが外れたドアから外へ出る。それと同時、ぶつかった車に乗っている男たちも車内からおりた。
「あっははは……大丈夫です……か？」

頭を掻いてはにかみながら加藤はそう言ったが相手側は全く表情を変えなかった。サングラスをした厳つい男二人が顔を緩ませることなく彼女を見つめる。
「お前、加藤沙紀警視正か？」
「あら、理解が早いじゃない。助かるわね」
そう言うと加藤は護身用のリボルバー拳銃を収めた腰に手をあてながら男の下へと近づく。車の後部座席、左側には例の少年がいた。おそらくこの車のドアは内側から開かないのだろう。なんというか非常に残念な扱いを受けている彼は被害者というのに。
「その少年、うちの管理下にあるんだけど。返してもらえるかしら？」
加藤は顎で車を指しながらそう言った。しかし男はため息をつくと何事もなかったかのように車に乗り込む。よく見るとセダンの後方はまったく潰れていない。対する彼女の車はぺしゃんこだ。
すると男はパワーウィンドウを開き、加藤に向かっていった。「文句は政府に言え」と。
そして車はそのまま発進する。無論、加藤は呼び止めたが止まる気配もない上に追いかける術もなかった。

「ったく、何様のつもりよ！」
車のドアを蹴る。先程の衝突でボロボロになった彼女の車はもう動きそうにはなく、今は怒りの矛先でしかなかった。一応車両保険を掛けておいたしレッカー車も来るらしいので問題はなかった。あるとすれば少年がハウンドドッグに引き取られたこと。彼は被害者であり加害者ではない。政府の悪事を隠すための組織であるハウンドドッグが出る幕では無いはずだ。
そこで加藤は前に御子沢に言われた言葉を思い出した。ハウンドドッグに関するオファー、加藤の親友であるということから御子沢を伝って本人にそれは伝えられた。その際に御子沢が言っていたのだ。

「彼らはどんな事情、立場を持っていたとしても政府の依頼を最優先とし、躊躇無しに実力を行使する」と。
だとしたら彼はあの事件の時。被疑者に捕らえられた時に偶然にも政府に関する機密を知ってしまった。そしてハウンドドッグが手を下しにきたのではないか？彼女はそう考えた。
しかしあの時少年は何の抵抗もなしに彼等に連れて行かれた――いや、あれほど精神的に衰弱した少年が抵抗することの方がおかしいのだろう。
だとしたら彼は殺されてしまうのではないか？最悪のビジョンが脳内に映し出される。まだ成長期真っただ中の少年。１５か１６ぐらいの少年が血を垂れ流し、桃色に染まった肉をまき散らして倒れる姿。
ゾッとした。彼女は息子などいない。だからこそこういったケースで遺された子供たちに対して全力を尽くしてきた。今回もそうしたかった。
だが、権力と言う名の無思慮な壁が彼女の前に大きく立ちはだかった。

「非検体０１亜久　聖か……」
白衣の男が安っぽい事務椅子に座りそう言った。目の前には大男二人に取り押さえられ体の自由を奪われた少年がいた。
少年の目は曇っていた。でもその中には純粋さもあり、赤子のようだった。
「悪くないな。いい仕上がりだ」
彼はそう言うと椅子から立ち上がる。そうして立ち上がったあとにトントントンと指で机を何回か叩いて見せた。後ろにいた両脇の大男二人は何がなんだか分からない様子でサングラスの下に隠した厳つい目を見合わせる。

途端、片方の男の目が消えた。いや、正確には顔が消えた。残ったのは生々しい跡を残す首の断面と美しい赤の鮮血。その血液が絵の具のようにもう一人の男に降りかかった。
びちゃ。
何かが垂れた。男は振り向く。その途端、激痛が全身に向けて迸った。その光景はよく見えた。でも見たあとももう一度確認をせざるを得なかった。
足が消えていた。その代わりに赤く染まった患者衣を身に纏った少年がいた。少年の手にはコンバットナイフが一本、綺麗な赤色を垂らしながら握られていた。
視界が反転する。ドシンと頭に転んだ衝撃が響いたあと意識は消えた。
拍手の音がする。乾いた空間に乾いた拍手の音。白衣の男ははにかみながら「上出来だ」といった。
それを見ると少年も少しだけ笑った。そして男の脇腹へナイフを差し込み、腹から股関節までを一気に切り裂いた。

血液が窓ガラスについた。そのガラスはマジックミラーになっていて外からは見えるが内側からは只の壁のようにしか見えない。ではそのガラスの中には何があるのかというと中学生か高校生ぐらいの少年と先程まで人間だったモノが三つ転がっていた。
その「モノ」からあふれ出た液体がガラスにべっとりと付着して中の様子を見づらくさせている。
「サーヴァント計画はここまで来たのか……」

血に染まったガラスを見ながら誰かが言った。
「ええ、既に調整の多くは終了しています。あとは実践を積むだけですね」
もう一人がそう返した。
「サーヴァント〈従者〉に猟犬。皮肉だな」
「いや、彼こそまさにハウンドドッグに相応しい人材ですよ。我々の研究が平和に役立てられるなら光栄です」
「平和――そうだな。」
彼は何か思い老けたような顔をした後、マジックミラーに遮られた部屋から出る。ドアは金属製でズシリと重かった。
「……それにしても良く出来たな」
部屋に残された男は鏡をなでるように触りながらそう言った。
「まさに芸術品。美しい殺人だ、悪と聖の融合。」

crazy.

It's

赤い光が世界を見たす。昼と夜の境界線、日没が始まったのだ。時期的に今は日が短く、学校が終わったのか学生が真面目に部活に取り組んだり勉強したり。しかしそれだけではない。頭髪を染めた男や女が群れて路地裏を占拠する。亜久はいつもそれが気に入らなかった。力のない弱者が群れてるだけの集団に構うつもりはない。彼にはやらなければいけない事があった。でも彼らはそう言った寛容というものがないのか透かした顔をした亜久を見るなり喧嘩を売り、そしてやられていった。それでも彼らは懲りないものでまた口先だけの弱者を呼んでは群れて襲ってくる。亜久は今日もそう言った目に遭うんだろうと思いながら歩いていた。

タバコや酒。本来未成年が行なってはならない物をまるで自慢するかのように見せびらかしている。煙をふかしながら頭髪を弄り携帯電話を操作しては迷惑な大声の雑談が耳に入る。

ただ邪魔だった。今の彼に見えているのは自分の存在意義〈レーゾンテートル〉それしか無かった。それを見出すことのみが彼の生きがいだった。

淀んだ空を見上げた。星の見えない汚い空はある意味満点の星空よりも彼を吸い込むような感覚に陥らせた。

凍えた手を暖めようとコートのポケットに手を入れた。その下に隠したナイフの形が微妙に分かった。

「……おい、何無視してんだテメェ」

またか……。亜久はそう思った。

もう殺したいぐらいにうんざりしていたのだ。

「俺に何か用か？」

亜久は肩をすかして首をかしげながらそう言った。

「ああ、もちろん用があるんだよ。なぁ？」

スキンヘッドの男は後方にいた頭髪を染めた男達に同意を求めると

その男達は若干の時間が経ってから軽い返事をした。
「で、俺は急いでいるんだが。そんなに大事な要件か？」
「ああ、大事な要件さ！」
スキンヘッドの男はそう言った途端に亜久に向かって拳を突き出した。しかしながらそのパンチは擦る事もなく亜久の頬の横を通った。うんざりした。本当にうんざりした。
だからもう止めにしようと思った。
悲鳴が耳元で鳴った。顔に血が当たる。
スキンヘッドの男は声にもならない悲鳴をあげると亜久の方を鬼のような形相で見つめた。だがそんな睨めっこをしたところで戦局が好転する訳ではない。今、亜久の手には街灯を反射した刃があり、その刃からは赤い液体がぽつりぽつりと垂れていた。勿論その液体の正体は彼が男の腕に刺した場所から溢れた血液である。
後ろにいた男たちは激昂した。仕方ないので亜久はナイフを一旦男から引き抜くと足に一突きしてやって動けなくさせる。そして流れるようにナイフを引き抜き向かってきた男たちの脇腹を同時に横に切り裂いた。
倒れた男たちは悲鳴を上げ、驚嘆した。
亜久は血に濡れたナイフをまじまじと見つめた後、その切っ先を彼等の心臓へと突き立てそのまま押し込んでやった。

死体をそのまま、ナイフを腰のナイフシースにしまっている途中で携帯電話が鳴った。まもなくして電話に出ると変成器でも使ったような奇妙な声がした。
「計画に支障を来すようなマネはやめて頂けますか、亜久　聖？」
彼は黙ってその声を聞いた。
「目標はあんなチンピラじゃないんです。もうすこし寛容を持ちなさい」
通話が切れる。

亜久はその一方的な通話の内容が気に入らなくて死体に蹴りを入れた。

現在　都内某喫茶店

コトン、カップを置く音がノスタルジックな雰囲気の空間に響いた。カウンター席に座った拳隆と嶺崎はマスターから珈琲を受け取るとそれを啜った。まだ冷めていない熱い珈琲は猫舌な嶺崎にはきつかったらしくフーフーと息を吹きかけている。

「んで、適当に経緯を語ってくれるとおじちゃん嬉しいんだがね？」

喫茶店のマスター。白髪混じりの髪を後ろで束ねた彼は黒いエプロン姿でアルコールランプを灯しながらそう言った。

「それがわかってりゃ俺も苦労してねえしこんなとこにわざわざ来ねぇっつの」

拳隆が不貞腐れながら珈琲をすするとマスターはそっけない返事をした。

年代物の薪ストーブがごうごうと音を鳴らし、ＢＧＭのジャズサウンドと絡み合うように程良い音量を保つ。

「――まあ、どの道武器は持ってたって困るこたぁねえだろうな」

マスターはアルコールランプをサイフォンにセットする。

「あの……お二人はそういう関係で？」

途端、嶺崎がおそるおそる聞いた。しかしながら拳隆もマスターも一度目を合わせたきりそっぽを向いて何も言わない。

「似た者同士なのさ」

新聞紙をひろげながら後ろの席に座った男が言った。

「似たもの同士って――」

「ああ、もういいよ。おやっさん、案内してくれ」
拳隆は飲み終えた珈琲のカップを力任せにカウンターテーブルに置くと立ち上がってマスターを見て、そう言った。
「……仕方ねえな。その気だったなら最初から言えってんだ」
店主はそう言うと黒いエプロンの右側についたポケットから鍵を取り出す。
「ついて来い、品揃えはあの時以上だ」
カウンターから出る。アルコールランプはそのまま、マスターは奥の暗がりへと向かう。そして嶺崎と拳隆もそれに続いた。

「なるほど、こっちの方もご立派で」
薄汚れたスイッチを押す。そうした途端に暗がりは一気に明るくなった。お店の倉庫のような所に来させられて二人はさらにその奥の暗がり。つまりは今いる所に連れられてきた。
その部屋は黒光りしている。その正体は金属。無骨な金属製のパーツ群が群れを為して光りを反射する。
「これって全部……」
「ああ、銃だ」
マスターはその中から一丁、結構小柄なショットガンを取り出すと拳隆に手渡す。
「お前に好みなんざ把握してるつもりだ。そうで近場でドンパチするしか能がねぇんだからな」
「そりゃどうも」
拳隆はマスターの皮肉を受け流しつつ、銃を確認する。ソードオフショットガンだった。
「どうせ警察とやりあうんだろ」
「……まあ、そうなるな」
拳隆は埃っぽい壁に寄りかかるとカートが入っていることを確認し、

マスターから弾薬を受け取る。
「あいつの言うとおり公安には悪い噂が流れてるって話だ。それは同様に衣笠にもな」
「それは俺たちが一番良く知ってるさ」
拳隆はそう言うとライダースジャケットについた埃を払った。

薄暗い倉庫からショットガンを片手に拳隆が現れても奥の席に座っている男は顔色一つ変えなかった。イヤホンから流れる音に耳を傾けながら新聞紙を熟読する。
「翔、随分と余裕そうだが」
「ああ？」
男がそう言うと新聞紙を畳み、イヤホンを耳から外す。冷めた珈琲を口へと運ぶ。
「どうやらＳＡＴの連中公に動くらしいが――」
「おいおい、そういうことはさっき聞いたときに言ってくれよ」
拳隆が不貞腐れながら言うと男は「いや……」と言葉を濁しながらイヤホンを指さした。よく見るとイヤホンのジャックは先程まで聞いていたラジオから外され、大きめの黒い箱のような物に繋がれている。
「……まさか！？」
途端、窓ガラスが音を立てて砕けた。その刹那、拳隆はカウンター席にいた嶺崎を無理矢理地面へと伏せさせる。
「クソッ、警察の無線傍受してたなら初めから言えってんだよ」
「金を受け取ってなかったからな」
初老の男はテーブルを盾に隠れながらそう言った。
「全く、やっぱりアンタは素直じゃない――ね！」
店内の柱から飛び出す。拳隆は直ぐ様フォアエンドを前後にスライドさせ、排莢を行うとトリガーを引く。シェルに収められた何十、何百もの弾丸が炸裂し、攻撃を仕掛けた者へと向かっていく。着弾

した鉛はＳＡＴのタクティカルベストをも突き破り腹から臓物と鮮血を溢れさせる。
「流石だな、よくメンテが行き届いてる」
もう一度ポンプアクションを行い、排莢、発射する。悲鳴と銃声。鉄の臭いと火薬の臭いが鼻を突く。
「当たり前だ、誰の銃だと思ってんだ」
そう言ってマスターは急いでランプの火を消し、カウンターに身を隠す。
「で、旦那。敵の数は？」
拳隆は壁に隠れてシェルを詰める。一部始終を見ていた嶺崎はもう泣きそうになっていて亜久と一緒に居たときは大丈夫だったのかとちょっと心配になった。
「数はそう多くはない。巡回中の連中がたまたま見つけただけだ、いまから逃げればそう簡単には捕まることはあるまい」
「そうか、ありがとよ」
壁から飛び出し、先程詰めたショットシェルに収まったベレットを撃ち出した。向こうが撃ってきた９ｍｍ弾が頬を掠ったが特に痛くもなく、赤い血の線が一本出来るだけだった。

「――出た、東京都千代田区霞が関２丁目１番２号」
嶺崎は死体の前で地図を広げ、愛用の振り子を使ってダウジングをしていた。何を調べていたかと言えば無論、敵を親玉の位置だ。
「この住所は国家公安委員会だな」
地図を見て初老の男はそう言った。
「やっぱり俺達はそろそろ向き合わなきゃいけないんすかね、いろんな物と」
ジャケットのチャックを締め、拳隆はそう言った。マスターは死んだＳＡＴの隊員を寝かせ、黒い袋に詰めると一緒に防腐剤を入れ始

めた。
「こっちの事は俺に任せろ。あとは好きにやんな」
そう言ってマスターは鍵を渡した。何のキーホルダーも付いていないシンプルな鍵を。
「お前さんが昔使ってたバイク、この通りの裏にある。早くどっかに行け、この疫病神が」
「……言われなくてもこんな店さっさと出てくってんだ。ほら嶺崎、行くぞ」
拳隆はそう言うとマスターの向く方とは逆に向いて歩きだした。それを見た嶺崎が「待ってください！」と言いながら追いかける。
「やはり似たもの同士だな」
「うるせぇな、お前も追い出すぞ」
マスターは初老の男から新聞を取り上げると死体の入った袋を持ち、店の奥へと消えた。

Ｇｏ　ｂａｃｋ.

あれから数日が経った。加藤の車はレッカー車に運ばれ高額な請求書が届けられることとなった。それはいい、問題はハウンドドッグだ。既に捜査本部は解散の運びとなりあの少年は表向きに「警察が保護」となった。確かに間違ってはいない。だが一番のポイントは保護したのがよりにもよって政府機関の汚職をかき消す最低の組織であったこと。
加藤は頭が回らなかった。あの少年はどうなったのだろうか？殺されてしまったのだろうか？あの時、ハウンドドッグに遭遇したときに頭に浮かんだ惨状が脳裏に蘇える。それが何回も起きるのだ。仕事は手につかないし口うるさい上司からはこっ酷く叱れれた。「公

安に委譲した事件にはもう関わるな」と。
まるでその口調は何かを恐れている、何かから逃げているようだった。

「やっぱりさぁアノ野郎ぜぇったいに何かかくしてると思うのよね」
水の入ったグラスをカウンター席のテーブルに置いてそう言った。
「……ねぇ沙紀、あんまり深入りしない方がいいわよ」
お世辞にも綺麗とは言えない定食屋。店内には昼休みの会社員でひしめき合っている。
「なによぉ、遥まであのジジィに肩入れすんのー？」
口を尖らせて加藤はブーブーと御子沢に批難を浴びせる。しかしながら御子沢は冷静に「ちょっとした忠告よ」と言っておばちゃんから日替わり定食を受け取った。
「……沙紀、正義感だけじゃどうにかならないことぐらい分かってるでしょ？いい加減大人になって」
味噌汁を啜る。豆腐の味噌汁は昔ながらのお袋の味という感じで体だけではなく心も温める。その間に加藤には生姜焼き定食が運ばれる。彼女はそれを有難うございます等と感謝の言葉を述べながら受け取る。対する定食屋のおばちゃんははにかみながら次の仕事に取り掛かった。
「確かにさ、正しいことだけじゃどーにもならないことなんてこの世にはめいっぱいあるわよ。そりゃもう沢山ねぇ」
割り箸を割る。パチン、という音がして細い木は二つに分かれる。加藤の箸は見事に真っ二つとなった。
「でもさ、それでも私達は警察なのよ。どんな理由があってとしてもさ自分が正しい事をするってのがアタシの仕事なんだって思ってる」
加藤は生姜焼きに箸を伸ばす。しかしながら御子沢は全く箸を動かそうとせずに指をプルプルと震わせていた。

「……何よ？」
すると途端、御子沢は震えていた手を口に当てて吹き出した。
「なっ、何よそれ……青臭すぎるわよ……」
その言葉に対して加藤はもう一度口を尖らせて抗議してみせる。
「いやぁ。ごめんごめん、随分と立派な話しだったからさ」
そういう御子沢の目はどこか笑っていて笑いで流した涙をハンカチで拭き取っている。
「馬鹿にしてるわねぇ？あーあ心外だわ、親友だと思ってたのに」
加藤はそう言ってため息を着いた後、黙々と箸を動かした。
「……でも、組織でそんなモノは通用しないのよ――」
御子沢がボソリと呟いた。しかしその声は加藤には届いておらず彼女は半分やけ食い状態で生姜焼きにかぶりついた。

日が落ちる。彼はこの光景を見飽きている。
赤く照らされた赤い死体。全てが赤で統一されたこの空間にうんざりしていた。手にもったナイフも、銃も、服も。あらゆるものが赤く染まる。
イヤホンからノイズが聴こえる。その直後、ボイスチェンジャーを使った男の声がそこから流れる。
「目標を殺害したか？」
男はそれだけ問うと亜久は「ああ」と肯定した。
「そうか、順調だな。この調子でメニューを継続しろ」
もう一度ノイズが入る。プツッと何かが切れたような音がしてそのノイズは消えた。
ナイフを見る。銀の刃は赤い液体がねっとり付いていた。亜久はそれが嫌で死体をつかってそれを拭き取るとナイフシースへと戻す。
命令に従い、殺す。まだ二十歳にも満たない彼の存在意義はそれだった。その為だけに生まれてきたと彼は思っていた。
もう一度死体を見やる。今日殺したのはアジア系とアフリカ系の在

日外国人。どれも全てが社会の裏での仕事を生業としてきた人間で現政権と関係のあるものだった。金を巻き上げ不必要になったら殺す。実にシンプルなシステムだ。
死体の処理は大抵下部組織がやってくれるとかで彼は何も気にしていなかった。だからこそ不良やチンピラをいとも簡単に殺してしまったりもするがどうでもいいことだった。
靴底がアスファルトを踏む。微かにその音が虚空に響き、消える。
ポケットから携帯電話を取り出すとそれで地図を開いて次の目標を探し出す。ここから徒歩で１０分。さほど遠くは無いと彼は思って休憩を挟もうという考えを取り消すことにした。
ズボンのポケットに携帯電話をしまうのはなんだか違和感を感じる。それよりもホルスターに銃を入れた方がしっくりした。

路地を出ると比較的交通量の多い国道へとでた。とはいってもこの時間帯はそろそろ通りも減ってくるような時間で多くは学校帰りの学生わ見かける。見た目高校生の亜久だが他の学生たちは彼を見ても何も思わなかった。ただ変わっているなと感じているだけだろう。隠し持ったグロックは周りからは見えないしまさか腰にナイフを締まっているなんて想像もつかないだろう。すれ違った学生の多くは友人との雑談に興じながら歩道を歩く。広がって歩くその様は彼にとってとても邪魔だったが気に止めることはなかった。
「――見つけた」
誰かが声を掛ける。
黒いスーツを着た女性が一人、街路樹と街灯の間に屏に寄りかかるようにして立っている。
「……お久しぶりです」
亜久はそう言って彼女の前を通りすぎようとする。しかし彼女の横を通ろうとした途端に細い腕が肩へと伸び、動きを止めさせた。
「簡単に通らせてくれるなんて思ってんぢゃないでしょーねぇ？」

短い黒髪を無造作に散らかした彼女は亜久の目を見て言った。
「亜久　聖くん？」

御子沢は首相官邸へと向かっていた。早足で歩くその音が雑多にまぎれてかき消されていく。
傍らには黒いブラインドファイル。無論、周りから中身は見えない。
これを今すぐ首相の下へ届けなければならない。彼女の正義感が事を起こした。それは加藤から伝染してしまったものなのだろうか。
それは彼女にもよくわからない。
今考えればこれを加藤に渡せば万事解決、全ては彼女がやってくれる。そうするべきだった。なのになぜ私はこんなことをしているのか？解決不能な疑問を抱きながら歩く。
ファイルに入っているのは独自に調べ上げたハウンドドッグの資料。
これほどまでのデータが出揃えば連中の悪行は晒され、全ては元に戻る。
あんな法案、通す方が馬鹿だ。倫理観が余りにも欠如しすぎている。殺しを殺しで対処し、犯罪を犯罪で消し、全てを無に葬る。辛辣に批判しながらも結局はそれが人間の宿命だと考えると彼女は落胆した。
途端、一人の男が目に入った。割腹の良いその男は狂気に満ちた笑みを浮かべると御子沢の行く手を塞ぐように立ち止まる。
「……どいてくれるかしら？私は忙しいんです」
「それって惚けているんでしょうか？私が誰なのか分かっているはずです。御子沢議員」
「ええ、分かっています。瀬島特殊警察課長。いや、ハウンドドッグ」
彼女はそういうと瀬島の顔を見上げた。１ｍ９０ｃｍはあるのではないかという長身の瀬島と少々小柄な御子沢が向き合うと一見して

父親と娘のようにも見える。
「恐らく貴方は総理直々に私の解任して貰うつもりでしょう？」
御子沢は動かない。二人は睨みあうようになった。
それから少しして瀬島は低い声で笑い声を上げる。
「残念でしたね、私は先程総理に辞表を提出してきたんです」
途端、御子沢の顔色が変わった。
「非常に残念、貴方の計画では私をクビにさせたあとに加藤沙紀でも後任にする予定だったのでしょうけどそれはもう無理な話ですね」
すると瀬島はその巨体をゆっくりと動かし、大きな手を御子沢の頭にポンと置いた。
「私達はプロセスは違えどリザルドは同じ物を求めている。しかし貴方方は根本的に違っている。そういった人は排除されるべきなんですよ。すぐに貴方の下にも口封じのお達しがきますよ」
瀬島はそう言うと高笑いをして御子沢とは逆方向に歩きだした。
拳を握る。悔しくて噛んだ唇からは鉄の味がした。

「悪いけど君はもう命令に従う義務は無いのよ」
加藤はそう言った。バックから赤い閃光を放つ夕日が逆光となり、彼女の姿は影のように見えた。
「それはどういうことですか？俺を逮捕するんですか？」
「いんや、そうじゃない。捕まったのは君じゃないの」
彼女はそう言うとゆっくりと亜久に向かって歩き出す。
「もう君は人殺しをしなくてもいい、ハウンドドッグは解体される」
「それはどういう？」
「……私がハウンドドッグ。いや、特殊警察課長だからよ」

御子沢遥。彼女は胸騒ぎを必死の抑えながら恐る恐るドアをノック

した。この先には日本のトップが居座っている。
それから少しして「入りたまえ、御子沢君」と野太い男の声が掛かった。彼女は一度深呼吸をした後、ドアノブを回して重厚な木製の扉を開いた。
「失礼します」
そう言って彼女は早足で衣笠の下へと歩く。彼こそが今の混沌の元凶。稀代の独裁者。
御子沢はふとした怒りを沈めると手にもったファイルを机に置いた。
「独自に調べたハウンドドッグに関するレポートです。彼等には多数の問題があります。よく目を通してください」
「……サーヴァント計画か」
衣笠がそう言った途端、御子沢はゾッとした。
サーヴァント計画。彼女が知人に頼んで調べさせたハウンドドッグの極秘計画。誘拐した子供に特殊な教育を受けさせ、完璧で忠実な『人間』を作り出す計画。
倫理的のも、人間としてもまともな者がやる事ではない。それを何故衣笠が知っていたか。もしかして彼もグルだったのか。
「先程私は瀬島君、並びにハウンドドッグの各主要メンバーから辞表を受け取った。所謂責任逃れという奴だ」
「でしたら尚更――」
「そして私はその前に加藤沙紀君に君の持ってきた物と全く同じ物を見せてもらった。既に後任は加藤君に一任した。君の案、採用させていただくよ」
衣笠はそう言うと御子沢の渡した資料を引き出しへと入れる。
「えっと……ありがとうございいました」
そう言って彼女は部屋を出る。何か抜けたような気分だった。
「たっく遥も遥よね、情報のソースが大辺だなんて。その分私が尻

拭いをせにゃならなくなったわけなんだけど」
「どういうことです？」
「亜久　聖、君はもう自由なの。狂った洗脳教育も犯人殺害による身体能力の増強だとかそう言った事もしなくていいの」
加藤は亜久の目の前で足を止める。
そうして彼女の細い手が彼の顔に触れた。
「今日からは私の下で働きなさい。幾分はマシになる。いや、そうしてみせる」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4784w/

猟犬たち The vindictive man

2011年11月9日22時04分発行